第 76 回岩手県総合計画審議会

（開催日時）平成 28 年６月 17 日（金）14：30～17：10
（開催場所）サンセール盛岡・１階「大ホール」

１　開　会
２　あいさつ
３　委員紹介
４　議　事
　（１）会長及び副会長の互選について
　（２）平成 28 年度における審議会の運営について
　（３）講演
　　ア　「いま『幸福』を考える」
　　（京都大学こころの未来研究センター　内田由紀子　准教授）
　　イ　意見交換
　（４）その他
５　その他
６　閉　会

出席委員
　岩渕明会長、鎌田英樹副会長、青木幸保委員、浅沼道成委員、五日市知香委員、伊藤昌子委員、遠藤譲一委員、金谷茂委員、神谷未生委員、黒沢惟人委員、斎藤千加子委員、酒井明夫委員、佐藤富美子委員、下向理奈委員、高橋勝委員、谷藤邦基委員、千田ゆきえ委員、恒川かおり委員、森奥信孝委員
欠席委員
　八幡博文委員

１　開　会

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　皆様、大変お待たせをいたしました。定刻となりましたので、ただいまから第 76 回岩手県総合計画審議会を開催いたします。

私は、事務局を担当いたしております政策地域部副部長兼政策推進室長の南でございます。暫時司会を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

本日は委員 20 人のうち 18 人の方々に御出席をいただいており、半数を超えておりますので、岩手県総合計画審議会条例第４条第２項の規定により会議が成立していることをまずもって御報告申し上げます。

なお、本日は八幡委員は欠席となっております。また、鎌田委員は途中で退席される予定と伺っております。なお、浅沼委員が後ほど遅れて御到着の予定でございます。

２　あいさつ

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　それでは、開会に当たりまして達増知事から御挨

拶申し上げます。

○達増知事　皆様、こんにちは。第 76 回岩手県総合計画審議会の開催に当たりまして、御挨拶を申し上げます。

新年度、新任期最初の審議会ということでございまして、委員の皆さんにはこの岩手県総合計画審議会の改選に当たりまして委員をお引き受けくださり、誠にありがとうございます。また、今日は大変お忙しい中、お集まりをいただきまして、重ねて御礼申し上げます。

岩手県では、昨年 10 月ふるさと振興総合戦略を策定いたしまして、「岩手で働く」、「岩手で育てる」、「岩手で暮らす」の３つの柱、そして人口の社会減ゼロ、出生率の向上を目指すということを定めたところであります。そして、今年の２月にはいわて県民計画第３期アクションプランを策定いたしましたが、これはこの岩手県総合計画審議会の御意見、御提言などを踏まえながら、また復興計画と軌を一にしてふるさと振興総合戦略も包含するものとして策定をいたしました。今年度は、これらの計画の実質的な初年度としてさまざまな施策の推進に全力で取り組むところであります。

このようなことから、今年度のこの岩手県総合計画審議会におきましては、東日本大震災からの復興、そしてふるさと振興の着実な推進、そしてその先にある希望郷いわての実現に向けて、いわて県民計画第３期アクションプランなどに掲げる施策に対しましてさまざま御意見をいただければというふうに存じます。

また、さらに今年度は長期的な県政推進の観点から、これからの 10 年を見据えた岩手の方向性について審議もいただくこととしておりまして、きょうはその議論のスタートとして「幸福」をテーマとし、京都大学、内田先生から講演をいただき、それを踏まえた幅広い御議論もお願いをいたします。

委員の皆様には希望郷いわての実現に向け、御専門の知見や御活躍の分野からの視点、また県民、地域の視点などから忌憚のない御意見、御提言を賜りますようお願い申し上げまして、御挨拶といたします。ありがとうございます。

３　委員紹介

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　続きまして、任期満了により委員の改選がございましたので、着席順に委員の皆様を私の方から御紹介申し上げます。

まず、青木幸保委員でございます。

○青木幸保委員　平泉町長の青木です。どうぞよろしくお願いいたします。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　浅沼委員は後ほど御到着予定でございます。

続きまして、五日市知香委員でございます。

○五日市知香委員　五日市です。よろしくお願いいたします。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　続きまして、伊藤昌子委員でございます。

○伊藤昌子委員　伊藤です。よろしくお願いいたします。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　続きまして、岩渕明委員でございます。

○岩渕明委員　岩渕です。よろしくお願いします。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　遠藤譲一委員でございます。

○遠藤譲一委員　よろしくお願いします。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　金谷茂委員でございます。

○金谷茂委員　よろしくお願いします。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　鎌田英樹委員でございます。

○鎌田英樹委員　鎌田です。どうぞよろしくお願いします。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　神谷未生委員でございます。

○神谷未生委員　よろしくお願いします。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　黒沢惟人委員でございます。

○黒沢惟人委員　黒沢です。よろしくお願いします。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　斎藤千加子委員でございます。

○斎藤千加子委員　斎藤でございます。よろしくお願いいたします。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　酒井明夫委員でございます。

○酒井明夫委員　よろしくお願いします。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　佐藤富美子委員でございます。

○佐藤富美子委員　どうぞよろしくお願いいたします。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　下向理奈委員でございます。

○下向里奈委員　よろしくお願いします。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　高橋勝委員でございます。

○高橋勝委員　よろしくお願いいたします。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　谷藤邦基委員でございます。

○谷藤邦基委員　谷藤でございます。よろしくお願いいたします。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　千田ゆきえ委員でございます。

○千田ゆきえ委員　千田でございます。よろしくお願いいたします。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　恒川かおり委員でございます。

○恒川かおり委員　恒川でございます。よろしくお願いいたします。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　森奥信孝委員でございます。

○森奥信孝委員　森奥です。よろしくお願いします。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　なお、八幡博文委員は本日御欠席をされております。

以上の皆様が第 19 期岩手県総合計画審議会委員として就任されています。

次に、議事に入ります前に本日の会議の進め方について事務局より御説明申し上げます。

○小野政策地域部政策推進室政策監　それでは、第 76 回岩手県総合計画審議会の審議等の概要につきまして御説明いたします。お手元の資料１を御覧いただきたいと思います。

本日の審議会でございますが、議事の（１）といたしまして、会長及び副会長の互選について、第 19 期岩手県総合計画審議会委員による初めての審議会であることから、会長及び副会長を選出願います。それから、議事の（２）でございますが、平成 28 年度における岩手県総合計画審議会の運営につきまして、事務局から御説明いたします。次に、議事の（３）講演でございます。本審議会におきまして、岩手県の今後 10 年の長期展望などについて御議論いただくこととしてございます。まず、それに当たりまして「幸福」をテーマに設定いたしまして、京都大学こころの未来研究センター、内田由紀子准教授から御講演をいただきます。御講演の後、意見交換といたしまして、御講演に対する御感想あるいは委員の皆様がお考えになっている岩手の将来につきまして、皆様からお一人ずつおおむね３分程度で御意見を頂戴できればと考えております。最後に、その他といたしまして委員

の皆様から御意見などがございましたら頂戴いたしたいというふうに考えております。
本日の審議の概要については以上でございます。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　ただいま浅沼委員が御到着されましたので、御紹介申し上げます。
浅沼道成委員でございます。

○浅沼道成委員　よろしくお願いいたします。

４　議　事

（１）会長及び副会長の互選について

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　それでは、ただいまから４の議事に入ります。
初めに、岩手県総合計画審議会条例第３条第１項の規定により、当審議会に会長、副会長、各１名を置くこととされており、その選出は委員の互選によることとなっております。会長、副会長の選出まで、仮の議長をどなたかにお願いしなければなりませんが、僭越ではありますが、事務局からお願いすることとしてよろしゅうございますでしょうか。

「はい」の声

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　ありがとうございます。
それでは、大変恐縮でございますが、谷藤委員に仮議長をお願いいたしたいと存じます。谷藤委員よろしゅうございますでしょうか。

○谷藤邦基委員　了解しました。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　ありがとうございます。
それでは、谷藤委員には議長席の方に御着席いただきまして、進行をお願いいたしたいと存じます。

○谷藤邦基仮議長　ただいま仮議長の指名をいただきましたので、暫時御協力をお願いいたします。
それでは、議事に入ります。議事（１）の会長及び副会長の互選についてです。岩手県総合計画審議会条例により会長と副会長は委員の互選となっております。互選の方法について、委員の方から何か御提案がございますでしょうか。

「なし」の声

○谷藤邦基仮議長　なければ、事務局としての案がございますでしょうか。

○小野政策地域部政策推進室政策監　事務局といたしましては、会長には岩手大学学長の

岩渕明委員を、副会長には一般社団法人岩手経済同友会副代表幹事の鎌田英樹委員をお願いしてはいかがかと考えてございます。

岩渕委員におかれましては、第 18 期に会長を務めていただいた実績がございます。岩手大学の学長として幅広い見識を持たれていることから会長に就任をお願いしてはいかがかと考えております。

また、鎌田委員におかれましては、岩手経済同友会においても役員を務めておられ、また、昨年、岩手県ふるさと振興有識者会議の座長をお務めいただきまして、本県の施策について御理解いただいていることなどから会長を補佐していただけるというふうに考えてございまして、副会長に御就任をお願いしてはいかがかというふうに考えてございます。

○谷藤邦基仮議長　ただいま事務局から会長には岩渕委員を、副会長には鎌田委員をとの推薦がありました。これについて御異議はございませんでしょうか。

「異議なし」の声

○谷藤邦基仮議長　御異議がないようですので、会長には岩渕委員に、また副会長は鎌田委員にお願いすることに決定いたします。御協力ありがとうございました。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　谷藤委員には仮議長をお務めいただきまして、大変ありがとうございました。

それでは、谷藤委員にはお席にお戻りいただきたいと存じます。

それでは、岩渕会長は議長席に御着席をお願いいたします。

ここからの会議運営は、条例の規定によりまして会長が議長を務めることとなっておりますので、岩渕会長よろしくお願いしたいと思います。

○岩渕明会長　それでは、皆さん改めまして、こんにちは。前の期も会長を仰せつかりましたが、微力ですが、先ほど知事からもお話がありましたが、これからの岩手の 10 年をどう考えるか、非常に重い任務がこの委員会には託されておりますので、どうぞ御忌憚のない意見を出していただき、ぜひいろいろな意見交換をしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、副会長に指名されました鎌田委員の方からも御挨拶を一言お願いします。

○鎌田英樹副会長　岩手経済同友会の鎌田英樹でございます。昨年はふるさと振興の議論に加わらせていただきまして、今回は総合計画審議会を通しまして多少なりとも岩手の将来にかかわらせていただき、とてもうれしく思っております。もとより浅学非才の身ではございますけれども、岩渕会長のもと誠実に務めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

○岩渕明会長　ありがとうございました。

それでは、早速議事の方に進みたいと思います。会議次第に従いまして、進めてまいり

ます。

（１）が終わりましたので、（２）の議題でございますが、平成 28 年度における審議会の運営について事務局から説明をお願いいたします。

○小野政策地域部政策推進室政策監　平成 28 年度における岩手県総合計画審議会の運営につきまして御説明いたします。

資料の２を御覧いただきたいと思います。平成 28 年度は、今回第 76 回を含めまして３回の審議会を予定しております。その主な審議事項等につきましては、下の表のとおり予定しております。本日の審議内容につきましては、先ほど申し上げましたとおりでございます。

第 77 回につきましては、平成 28 年 11 月ごろの開催を予定しておりまして、政策評価結果につきまして、またふるさと振興総合戦略及び国土強靱化地域計画の進捗状況について、さらに幸福に関する指標研究会の中間報告についても御報告する予定でございます。

なお、幸福に関する指標研究会の概要につきましては、１枚おめくりいただきまして、次の資料でございますけれども、「岩手の幸福に関する指標」研究会についてということで、岩手らしい幸福に関する指標について本県の社会経済的な背景、地域の状況などに関して広範な知見を有する有識者の皆様から意見をいただくため、研究会を設置し、指標に関する研究を進めていただいているところでございます。この中間報告について、11 月ごろの今年度第２回の審議会において報告いただく予定でございます。また、第２回では、その中間報告もあわせて、踏まえて本県の今後の 10 年の方向性について引き続き御審議いただく予定でございます。

第 78 回の審議会は来年、平成 29 年２月に予定してございます。内容につきましては、29 年度当初予算について、政策評価結果等に係る政策等への反映状況について、そして引き続き本県の今後の 10 年の方向性について御審議をいただく予定でございます。

以上でございます。

○岩渕明会長　どうもありがとうございます。

ただいまの説明に関しまして御質問あるいはコメント等ございましたらお願いしたいと思います。

今年度は３回開催予定ということで 11 月、それから２月 13 日、これは決定ですね。11 月はまだ日程は出ていませんが、見ていただいたとおり幸福に関する指標云々というところで、その報告も受けるということでありますので、その辺も考慮しながら意見交換を進めていきたいと思います。特にご意見等なければよろしいでしょうか。

「はい」の声

○岩渕明会長　それでは、このような形で今年度審議会を運営してまいりますので、どうぞ委員の先生方には御協力よろしくお願いしたいと思います。

それでは、次に議事の（３）に入りたいと思います。議事の（３）は講演でございます。タイトルは「いま『幸福』を考える」です。準備がありますので、少しお待ちください。

岩手県総合計画審議会条例第５条の規定により、審議会は必要に応じて学識経験のある者の出席を求め、その意見を聴くことができるとされております。これに基づきまして、京都大学こころの未来研究センター、内田由紀子准教授に御講演をいただきます。

事務局から講師の紹介をお願いいたします。

○小野政策地域部政策推進室政策監　それでは、講師の先生の御略歴を御紹介申し上げます。

内田先生は、1998 年に京都大学教育学部教育心理学科を卒業、2003 年に同大学院人間・環境科研究科博士課程を修了されました。その後、ミシガン大学、スタンフォード大学客員研究員、甲子園大学専任講師を経て、2008 年１月に京都大学こころの未来研究センター助教に着任され、2011 年から同センターの准教授でいらっしゃいます。2010 年から 2013 年までの間、「内閣府　幸福度に関する研究会」の委員も務められております。現在は幸福感・他者理解・対人関係についての文化心理学を中心とした研究を行っておられます。本審議会における本県の今後 10 年の長期的展望についての議論に資するため、本日は御多用中のところ先生にお越しいただきまして、「幸福」に関する御講演をいただくものでございます。

それでは、内田先生よろしくお願いいたします。

○内田由紀子氏　皆様、初めまして、こんにちは。京都大学の内田と申します。昨日京都から参りました。このたびは、このような重要な総合計画審議会の場にお招きをいただきまして、また、第１回という重要な会議の講演をさせていただくということで大変ありがたく光栄な気持ちでございます。本日は非常に僭越ではございますが、私の方から「幸福について考える」というタイトルで講演をさせていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

幸福について、この岩手県の方でもこれから進めていかれるということで大変心強く、国民の一人としてもなのですけれども、非常に心強く感じているところです。特に、今さまざまな自治体あるいはいろいろな国で、幸福についてきちっと考えて理解をし、また、測定をしていこうというような枠組み、そして、その測定した結果を施策活用していこうというような形でさまざまな実質的な研究みたいなことがなされてきております。今日は、そのようなことのある程度端緒になるような幾つかのデータといいますか、ヒントになるような事例というのをお持ちできればと思いましたので、どうぞよろしくお願いいたします。

私なのですけれども、専門は社会心理学・文化心理学ということで、基本的に心理学者なので、測定というものを基本的には非常に関心を持って研究しています。ただ、そこに「社会」、「文化」というふうに名前がついていまして、一体社会で何が起こっているのか、あるいは私たちが暮らしている文化的な背景や物の考え方、習慣みたいなものが一体どのように私たちの心の理解、心の動きの中には当然幸せを感じるようなものも心の中にあるわけですが、これがどういうふうに実際にお互いに関連し合っているのかということを実証的に研究するという手法を用いて研究をしています。

心理学者もいろんな心理学者がいるのですけれども、私は基本的には実証研究、調査とか実験研究を行って、それを意味づけをしてフィードバックをしていくということをやっ

ています。ですので、幸福感というのもこうした中で非常に重要な私の中の研究のキーワードでして、例えば日本社会の中で起こっている現象と日本の人たちが思う幸福というのは一体何だろうかというのをまず理解することが必要で、実際それがどうなっているかを調査する。そして、それに対して意味を与えるというようなことを長らくやってまいりました。

私が所属している京都大学のこころの未来研究センターというのは非常に小さな研究センターでして、教授が今５人ですね、准教授が３人、助教が４人という非常に小さな組織なのですけれども、幸福ということに関してさまざまな視点で研究がなされています。

広井良典教授は、こちらの幸福度の研究会のアドバイザーという形で就任させていただいていると思いますが、広井教授は公共政策関連から幸福について頑張っています。

このほかにも、私はその調査研究をしていたりとか、あとは臨床心理学的な立場であるとか、もう少し哲学的な立場あるいは脳科学的な立場などからも幸福について研究をしております。

本日は、特に岩手県の総合計画の中でどのように幸福を考えていくかという中で、やはり地域の幸せというのに焦点を当ててお話しをしたいなということで考えております。その中で、私が考えている３つの重要なキーワードがございます。

１つは、個人と集合のバランスというもので、これは達増知事の講話の中でもお話がありまして、まさにすごく共感をしているのですけれども、個人が幸せであればいいのか、それともこの地域全体としての幸せというのも考えなければならないのか。だけれども、地域が幸せだったら個人のことを考えなくていいかというのは、もちろんそうではない、このバランスというのをいかに考えていくのかということが地域の幸せを考えていく上では非常に重要なキーワードになると思います。

２つ目に考えているのが価値の共有という視点です。これは、あるところに暮らしている私たちというのは、そこに何らかの愛着であるとか、そこにメリットを感じて私たちは日々暮らしているわけです。もちろんたまたま生まれて、育ったからという理由もあると思うのですけれども、今の私たちの社会の中では、特に自由に動くことができるのです。そういう中で、ここに住みたい、この地域のために何かをしてみたいという思いというのは、まさに価値というものがそこにあり、それがいかに地域の中で共有をされているのかということに大きく関わっていると思います。

こうした中で、この価値の共有を支えるのがつながりと解放ではないかということを考えています。つながりというのは、特に地域の中でどれぐらい人と人同士がお互いのことを気にかけ、また、お互いに相談相手となり、支え合うことができるかどうか、これを提供するのがつながりの価値です。

一方で、私はここに「解放」というのを書いています。解放というのは、つながりというのが内に閉じたものではなくて、外にも広がっていくこと。例えば岩手県の中で、Ｉターンの方が来られるとか、Ｕターンの方が来られるとか、いろんな方が移住して来られるかもしれません。あるいはほかの県、ほかの国とのいろんなつながりを通して、新たにこの県の価値というのを見直すこともあると思います。こうした中で、この解放のつながりというのも地域の幸せを考える上では非常に重要なキーワードではないかということを考えております。

では、まず幸福についてしばらくお話をしたいと思います。幸福の研究というのに関して、今でこそさまざまなところでまじめに議論されて、そして、まじめにいろんな指標づくりがなされているわけですけれども、最初のうちは社会科学の中で、いわゆる主役としては存在していませんでした。1980 年代ぐらいになってから徐々に個人の幸福、いわゆる主観的な幸福感についての研究知見が積み重なるようになってきて、ある程度、例えばあなたは幸せですかという聞き方に関してもかなり精緻化して、こういう生き方をすればいいのではないかみたいな研究がなされてくるようになりました。

そうした中で、特に 80 年代の後半ぐらいからどんどんと幸福研究というのが伸びてきます。そして、2000 年に入ってからは、もう本当に日本あるいはアメリカ、先進国において経済的なところの行き詰まりが徐々に見えつつある中で、私たちが一体何を豊かさと考えて、何を求めて暮らすのだろうかということが重要視されてきて、心理学だけではなくて、まさに公共政策、経済学、さまざまな研究者が幸福ということに関して研究を始めるようになりました。この個人の幸福というものに関して一定の定義がアメリカでなされています。これもアメリカの研究のマイヤーズとエド・ディーナーという非常に有名な心理学者ですけれども、教科書でこんなことが書いてあります。「幸福な人物とは、若く健康で、よい教育を受けており、収入がよく、外交的・楽観的で、自尊心が高く、勤労意欲がある」こと。どう思われますか、「そうだ、そうだ」という感じがありますか、それとも「これは、一体」みたいな感じはありませんか。私は、これを初めて見たときは、「これは、一体」と思いました。つまり、こんなにいいことがたくさんある人が集まって、お互いに何かバランスよく共存することというのは果たして本当に可能なのだろうか。実際にアメリカはこのように重要なよい要素をたくさん挙げていて、確かにこういう人たちは幸せだというふうに言われているのですけれども、一方で、もしかするとここに格差みたいなものが生まれてくるかもしれない。あるいは全体的な幸福みたいなことに関してはやや軽視されてきたようなことがあるのではないか。つまり、個人の幸福がもたらすコンフリクトみたいなことというのが生じてくるのではないか。例えば環境配慮行動、これ非常にわかりやすい例ですけれども、人々が自由に、一番楽ちんに安全に暮らしたいと思ったときに、ごみは自分の家にない方がいいです。ごみがあると何かにおいを発するかもしれません、何か菌が湧くかもしれません。自分にとっては不快なものであるとすると、普通に捨ててしまえばいいというふうに考えるのです。ところが、それが自分の家以外のところにあればどんどん、どんどんみんながごみを捨てていったとすればみんなの公共の場である場所にごみが集まってしまう。これは果たして住んでいる人にとって本当に幸せな状態と言えるのだろうか。自分が自分の幸福を追求する結果として、場の幸福の力みたいなものが弱まることもあるのではないかと。そうしたときに、本当はごみを捨てたいけれども、少し我慢をして、この場の幸福のために自分の幸福というのを少し我慢していく、そのことが翻って自分の幸福につながるのだというような意識の変化みたいなものが必要なのではないかということが言われ始めたのが、本当に 2000 年代に入ってからこうした研究がたくさん出てくるようになりました。つまり、個人の幸福というのは、もちろんいいことがたくさんあれば幸せなのかもしれない。けれども、個人の幸福を支える場の性質についてもきちんと考える必要があるのではないかということです。

有名なところでは、皆さんもテレビとかで御覧になった方もおられるかもしれませんけ

れども、イチロー・カワチ先生という、まさにイチローですね、きのう偉業を成し遂げたイチローと同じように片仮名表記でイチロー・カワチ先生が、日本の先生ですけれども、ハーバード大学で活躍されています。公衆衛生の先生です。彼が最近いろんな研究をやっている中で、地域レベルで考えていくことの重要性についていろいろ説いています。例えば、読んだ方もいらっしゃるかもしれませんが、全体的な信頼関係が低い地域に住んでいると心理的ストレスが感じられやすいという研究があります。これは本人がどれだけ人を信じるか、信じないかにかかわらず、周りのみんなが何となくお互いに信じ合っていないところで暮らしているとストレスかかってしまうと感じるのです。これまさに場の持っている力関係です。つまり、個人がどう頑張ろうとも、そうではないことがある。つまり、個人が何とかするだけのものではなくて、もしかするとその地域なり、場みたいなものに関して非常に強い影響があるのではないかと。これは、個人レベルの例えば性別や年齢や教育水準、喫煙だとか、飲酒だとか、全部統制してもこの地域の信頼関係の効果が残るということを研究で打ち出しておられます。非常にこの辺は私も重要な知見ではないかなということを考えておりまして、まさにこの場。では、この「場」とは何だろうと。地域が持っている価値や文化というのは一体何だろうということをずっと考えている文化心理学の研究ともかなり親和性が高いかなというふうに考えています。

例えば「場」ということを非常に大きなスケールですと国というレベルで考えてみると、非常に有名なのですけれども、主観的幸福感のマップという研究があります。これは、横軸がＧＤＰ、経済水準、縦軸が主観的な幸福感、これはそれぞれの国に何人かサンプルで調査を行って、その人たちの平均値を用いてマッピングを行っております。

このグラフを見ていただくとわかりますように、ＧＤＰと主観的幸福感は相関をします。相関係数 0.4 から 0.5 ぐらいの相関が出てきます。ところが、御覧いただければわかりますようにＧＤＰが幸福にもたらす効果というのは、実はずっと線形に上がっていくわけではございません。頭打ちになります。大体このあたりのところですね。ここまではずっと線形に来るわけですけれども、ある一定の水準になるとそこからどんどん、どんどん経済成長をすればするほど人が幸福になるかというと決してそうではないという話になります。

もう一つは、ＧＤＰが低くても幸福度の高い国があります。ＧＤＰが低い国というのはこのあたりを指しているわけですけれども、結構分散が大きいのです。上の方は、御覧いただければわかりますように、いわゆるラテンアメリカ系の国、メキシコとか、コロンビア、ベネズエラ、何となく私たちは想像ができるわけですよね。つまり、ちょっと明るい雰囲気で、ＧＤＰとか低い部分もあるかもしれないけれども、まあ、楽しく乗り切っていこうみたいな雰囲気があるのかもしれない。逆に、いわゆる旧共産圏の国々というのはＧＤＰも低いし、実際に幸福度も低いということがわかっています。

さて、その中で日本はどうなのだろうということがよく取り沙汰されます。ＧＤＰの高い先進国の分布は大体この辺の塊として挙げられるのですけれども、日本の幸福感というのはこのあたりと低いのです。ちなみに、どれぐらい低いか。難しいのですけれども、この図で言うとフランスとイタリアだとこの間ぐらいですよね。それ聞くとそんなに悪くないのではないかというように思うかもわからないのですけれども、一方で同じＧＤＰの水準でも、いわゆる北欧ですね、デンマークとか、このあたりの国の幸福度と比べるとかなり低いわけです。あるいはアメリカ、カナダ、このあたりと比べても日本の幸福度は低い

というふうに言われています。

これに関してどうしてだとか、何で低いのだ、これもうちょっと上げなければいけないのではないかみたいないろんな議論が実際にあるわけです。１つは、グローバル化の影響というのが一体あるのだろうかという話があります。日本の幸福というのは、非常にお互いのつながりとか、支え合いみたいなものが重要であると。これに対して、非常に日本も個人主義的なものがどんどん広がってきたのではないか。例えば都市化してきたり、成果主義というのが出てきたり、労働市場が流動的になってきたり、教育においても個性が重視されて、あなたの自分の人生をきちんと自分で選択をしましょうという、こういう価値観が出てきている。これは、私たちが何十年も前から、日本が長らく追いかけてきたものの一つなわけです。つまり、自由を手に入れたり、あるいは地域というものの地縁とか血縁みたいなことから少し離れて、ある種、自由な個人として生きていくということに近代的な生活の価値を見出してきたというふうに言えます。これらは、本当にここに与える影響をきちんと持っていたのだろうかということが一つの疑問と考えられるわけです。

こうした個人の都市化であるとか、自由選択を可能にしていることの一つは、やはり経済的なことにほかならないわけですけれども、ここに幸福のパラドックスというのがあります。イースターリンという経済学者が 1974 年に幸福のパラドックス、つまり経済成長というのは必ずしも人々の幸せに結びついていないのではないかというようなことを提唱いたしました。日本のデータを見ても実は同様なわけです。1978 年からずっとＧＤＰ、１人当たりＧＤＰというのは基本的には上がってきた。もちろん 2008 年以降下がっていますけれども、ちょっとこれは飛ばして。

全体的に見るとすごく上がってきている。しかし、幸福度や生活満足度の内閣府による定点調査を見てみるとほとんどフラットなわけです。これを一体どう捉えるか。つまり、私たちはいろんな形で個人の自由であるとか、経済的な水準、あるいはインフラの拡充、充実というものを得てきたわけですが、これがどうしてもなかなか幸福というふうなものとは完全に１対１の対応をしないものであると。だからといって、経済的なことが重要ではないという意味ではありません。経済というのは非常に重要なもので、先ほどのＧＤＰのグラフを御覧いただいてもわかりますように、経済の状態がものすごく悪くなるとやっぱり振れ幅がものすごく大きくなってしまいます。これは、国の中の人でも、やっぱりすごく経済格差が生まれてきたりとかして、不安定になるというのは間違いありません。つまり、一定水準のＧＤＰ、生活水準の提供というのはとても重要なわけです。しかし、一方でそこから私たちは完全に生活満足度を得られるかというと、なかなかそうではない。例えばよくあるイースターリンのパラドックスに関する解釈というのは、１つは私たちが慣れてしまうということです。例えばどうしても買いたい車があったとします。あの車が手に入ったらどんなに幸せだろうと思って、私たちは日々貯金をしてやっと買えました。買えたときはうれしくて、うれしくてしようがなくて磨いたりとか、なかなか内装のビニールとかも剥がせないみたいなことが結構あると思うのですけれども、でも多分１年後に、この車があるから幸せだなと思える人がどれだけいるか、ちょっと難しいですよね。

同じようなことというのは良いことにも、悪いことにも言えます。例えば、結婚するときもこの人と結婚できたら、ものすごく幸せに違いないと思って結婚して、10 年、20 年たって同じような感覚で言えるかというと、いるのが当たり前みたいになってしまったり、

一々感謝をしなくなる。でも、その分、人間というのは慣れることができる動物なので、つらいことがあった後にも、こういうふうにしてそこに落ち込むだけではなくて、少しレジリエンスを持って復活することもできるという良い面もあります。ただ、そうした中で、物質的な豊かさというのが常に幸福度、満足度に影響を与えてくれるかというとなかなかそうはなっていないという問題が一つ挙げられます。

もう一つは、やっぱり基本的にＧＤＰが上がっていくと、どうしても格差が増えていくということは関連があるわけです。格差が増えたときに全体として幸福度が上がる人もいれば下がる人もいて、平均点が同じぐらいになってしまうという、こういう議論もあります。

ただ、総じて言うと、こうして日本の幸福がずっと低いまま、ほかの国に比べると低いままであるということに関しては、社会科学全体の中でも何でだろうという話が出てきたわけです。なぜ低い。１つは、日本社会が不幸なのではないかという説です。自由選択が実際に乏しいのだと、働く時間が長過ぎるのではないかと。ちょっと長過ぎる気もします。長過ぎる、あるいは格差が広がっていて、夢や希望がないみたいに悲しいことがたくさん並べてある。

もう一つは、日本人がちょっと無感覚なのではないかと。いまいちみんなウキウキしたりしないですね、多分そんなに。そうするとうれしいとか言って盛り上がったりすることが非常に少なくて、そうするとだんだんモノトーンな感じになってしまうのではないか。どちらにしても悲観的なお話が結構出てきます。

しかし、一方で幸福はこうあるべきだという価値観がもしかして最近だんだん一元化しているのではないか、それ本当にいいのだろうか。例えば日本にとって、あるいは岩手県にとっていいのだろうかということについて、やはり中身を考えていくというのが政策決定において非常に私は重要だと思っています。実際に日本というものを大きな括りで取り上げてみても、ほかの国とは違っているところはあります。

例えば日米比較をしてみると、すごくこれ如実なのですけれども、穏やかな気持ちを感じるときに日本では幸福だというふうに感じられやすいことがわかっています。一日の中で何回も、今あなたどのぐらい幸福ですかと何度も繰り返していくと、日本だと結構お風呂に入っているときとか、風呂に入るとほっとしてうれしいなとか、あるいは寝る前みたいに、感情状態が非常にウキウキ、ドキドキはしていない、どちらかというとリラックスしてほっとしているようなときに幸せが感じられやすいということがわかっています。これに対して、北米だともう今から行くぞみたいなウキウキしているときに幸せだというふうに感じられやすいということがわかっています。

また、日本では良いことと悪いこととのバランスとして考えられる傾向があります。つまり、自分一人が良過ぎるととか、他の人にとっては良くないのではないかと思う傾向があったり、あるいは今幸せ過ぎると、次に何かやばいことが起こるのではないかというふうに考えたりする傾向があります。実際に幸せというものの意味を幾つか分析をしてみると、日本では幸せ過ぎるとかえって怖い。運を使い果たした気がする。自分の成長が止まる気がする。周りの人の空気を読めなくなってしまうのではないかというふうに、ある種個人と集団のバランスというものを非常に内包させた幸福感を持っているのです。自分が一人勝ちでうれしければいいということでは余り考えないのです。

一方で、アメリカにはそれがないわけです。むしろ自分が幸せな状態になれば、自分はもっとそれを周りに伝えて他の人を幸せにできるかもしれない。僕こんないいことがあったのだよ、どうだというふうに示すことで周りの気分を明るくできるかもしれない。だから、それについて隠さなければいけないみたいなことはないのではないかとか、あるいは今運を使い果たしたとは思わないのです。今運の波が来ているので、どんどん投資しましょうというふうになっていきます。なので、人生に対する恐らく考え方、根本的な価値観みたいなところが幸福についての考え方にもかなり影響している。あるいは日本では関係志向的なので、周囲の人の幸せというのが非常に重要で、私一人が幸せなのではなくて、大切な人が幸せだろうか、これはとても大切な概念になってきます。

これに対して、北米だとやっぱり自分の価値というのを確認できるかとか、自尊心が重要なのです。この自尊心がなければ、ある意味非常に厳しい、流動性が高い社会の中ではまだまだ渡っていけない部分も恐らくあるのだろうと思います。

そして、最後に幸福を評定する基準として、日本ではどう、人並み、例えば 50 代男性としてはちょうどいい感じかなと、こういうふうに思って幸福とつけているのが多いのです。そのときに人並み感がとても大切で、要するに基準がある。基準に対して、基準というのはとにかく横にいる誰かではないのです、何となく「らしさ」、例えば学生らしさあるいは課長らしさ、何となくその「らしさ」的なもので比較をして、自分というのはそこそこできているかどうかというような判断の仕方をすることが多いです。

これに対して欧米だと自分の自由選択をいかに持ててきたか、そこで自分で自分の裁量でいろんなことをどんどんと進められているかどうか、幸福の基準だって自分でちゃんと決めたいというような傾向があることがわかっています。

こうして、国という非常に大きな括りの中で見ただけでも随分と幸福というものの中身が違っているのだということがわかってきます。

これは、内閣府の幸福度に関する研究会に出たときの調査なのですけれども、現在あなたはどの程度幸せですか。これは、国際比較の調査で非常によく使われる 0 点から 10 点までで測定してもらうもので、日本でどれだけ頑張ってサンプリングしても 6.6 が平均なのです。いろんな調査、高くても 6.8 ぐらい、低いと 5.9 ぐらいになります。これやっぱり低いのです。ほかの先進国だと 7 点、8 点が普通にあります。これは確かに低いなとなるわけですが、ところがここに理想の幸福状態という聞き方を試しています。完璧に幸せなのは 10 点だと考えてください。半々ぐらい、幸せと不幸せが半々ぐらいなのを 5 点だと考えてください。あなたの理想的な幸福の状態というのは一体何点ですかと聞くと大体の人は 7 点とか 8 点と答えます。つまり、10 点満点の幸せというのはあまり目指してはいないわけです。なぜか。特に若い人にこういう傾向があります。若い人にとっては今 10 点になってしまうと、将来ここで全て達成し切った感じになってしまって、将来だんだん下がってしまうから怖い。むしろ 20 代、30 代、このあたり、6 割ぐらい、そこから徐々に上がっていくというのがよい人生というふうな考え方をしています。ですので、理想の幸福みたいなことから考えると現在の幸福というのは、実はそれほど悪くはないということも見えてまいります。

この内閣府で私がいたときの、ちなみに、きのうから私は県の職員さんといろんなディスカッションさせていただいて、その中でちょっとスライドを配付資料の締め切りの後に

ちょこちょこと変えた部分がございます。これはちょっと載っていない部分ですけれども、非常に有名な内閣府の幸福度指標案をつくったものなのですが、このときには日本の幸福度というのを考える上で、この３つの柱、社会経済状況、健康、関係性と。この関係性というのがかなり日本の中では重要なのではないかという形で、一つの大きな柱としていました。このときには、特にそれぞれの柱の中にあるものというのがいかにして人々の主観的な幸福あるいは理想の幸福との差みたいなものを説明しているのかというようなことをきちんとモデル化していこうということを考えてみました。

ただ、こういう世界的な比較、例えば日本の国でやりますとどうしても人は比較をしたくなります。内閣府に私がいたときにも一番よくあったお問い合わせというのが、例えば県別のランキングを出してほしいと言われました。内閣府でせっかく全国サンプリングしているのだったら、県別のランキング出せますよねとか言われて、何でそれを知りたいのですかというと、だってうちの県が一番かどうか知りたいですというふうに、そのお問い合わせはよくありました。

今度は日本の指標をつくったら、内閣府の方とか、皆さんおっしゃっていましたけれども、例えばＯＥＣＤに参加しているさまざまな他の先進国の指標とも比べたい。つまり、日本が大体どの辺にいるのか知りたいわけです。ところが、ランキングというのは実は非常に難しいところがあります。なぜかというと、本当にその測定方法でよいのかみたいな問題がどうしても出てくるのです。

例えばこれ世界的な比較でよく用いられているのに人生満足感尺度というのがあります。これ５項目ですごくいい尺度ではあるのですけれども、例えば、大体において私の人生は理想に近いものであるとか、もう一度人生をやり直すとして、私には変えたいと思うところがほとんどない。これまで私は望んだものを手に入れてきた。何かなかなか獲得志向なちょっと押せ押せな尺度立てですね。これ確かにアメリカはすごく高いのです、得点が。日本の大学生とかでやるとみじめなものですよ、非常に非常に低いです。学生にしてみれば、何で 18 歳とか 19 歳でこんな望んだものを手に入れたみたいな状態になれないだろうというふうな、そういう感覚を持つのです。そうすると、この尺度で実際にいろんな国で測定をして日本で低かったですといったときに、それが本当に私たちにとって重要な情報になっているのかどうかということはもちろん考える余地があると思います。もちろん研究としてはおもしろいです、十分おもしろいのですけれども、本当にそれを生かして私たちが何かをすることができるのだろうか。例えば望んだものを手に入れてきたと考えられるような教育をしましょうとなったときに、それが本当に私たちの目指している幸せの姿なのだろうか。つまり、どういう指標を使うかということと、私たちが目指す幸せの姿というのは結構融合していなければならないということが挙げられます。

ここで、私たちが日本的な発想から尺度をつくってみようということでつくったことがあります。これ実際には９項目ぐらいあるのですけれども、例えば自分だけでなく、身近な周りの人も楽しい気持ちでいると。周りの人に認められていると感じる。大切な人を幸せにしていると思う。平凡だけれども、安定した日々を過ごしている。周りの人たちと同じぐらい幸せだと思う。これでやると日米差は消えます。アメリカでもこれは結構高い。日本でも結構高い。いわゆる日米格差みたいなものがなくなりました。

やっぱりこうしたいろんな尺度というのは、恐らくいろんな観点から測っていくことが

必要で､何をもって私たちは幸せな状態というふうに考えるかという議論と切り離せない。実は、私はこのあたりにいくと幸福度の指標を策定する意味があるのではないかというふうに思っています。つまり、指標を用いて数値を出して、うちは何点でしたというために使うのでは、余りにもったいない。余りにもったいないというか、情報がないわけです。むしろ本当に県民の方々、とくに市民の方々に考えていただく議論の土壌みたいなものに移行した尺度というものが反映されているべきだろうと思うのです。つまり、何をもって私たちは幸せだと考えるのか、何を入れたいのか、何がどうなっているのか、うれしいのか、これを策定していく、このプロセス自体に恐らく価値があるのではないかと。比較研究してみると非常にシンプルな平均値の比較というのはみんな大好きで、わかりやすいですよね、何が何位になりましたとわかりやすいのですけれども、やっぱりそれだと余りにも何の競争をしているかわからないですよね。つまり、ランキングが上がるとどこかは下がるわけです。それでうれしいのか、本当にという問題があります。そして、幸福の意味を検討することの方がむしろ大切であると。

あともう一つは、これも重要な観点です。実際に客観的にデータをいろいろととってみると、意外に見落とされていたことが、あっ、これ重要だったのだとわかることがあります。要するに、普通に考えたらこれが大事だ、これが大事だといろいろ立てていくのですけれども、実際にデータを見てみると大事だと思っていたものが意外に大事ではなかったり、あるいはそうでもなかったところというものがとても実はいろんな形で影響しているということがあります。ついつい私たちにとって当たり前のことは見落とされがちで、余りにも当たり前。例えば山がきれい、自然がすてきで、食べ物がおいしくて、こういうのはもしかするとこの辺の方にとってはすごく当たり前なのかもしれません。当たり前なものというのは、それがなくなると気がつくことがあるのですけれども、普段から評価するかどうかというとなかなかしないのかもしれません。だけれども、こうしたものというのは別の形で幸福に効いてくる可能性があります。それが直接幸福につながらなくても、この県に住んでいて良かったとか、愛着みたいなものに変わってくる可能性があります。そして、その愛着というものが実は幸福というものにとても影響しているということがあると思います。つまり、幸福に行くためにいろんなルートがあって、それぞれのものがかかわり合いながら最後の幸福というものにどのように影響してくるか、こうした分析をしていくことというのもとても大事になります。

さて、ここからですが、幸福について個人とマクロということをちょっと考えていきたいと思っております｡どこに幸福な人が多いかというのはよく行われる研究の一つでして、このときには、先ほどのＧＤＰと主観的幸福感をグラフでも示しましたとおり、例えば日本の数字とかアメリカの数字というのは個人に聞いた幸福を平均しているわけです。平均値として用いています。例えばアメリカ、これはホワイトという人のやった研究ですけれども、色が強い地域だと幸福度が高い、平均点が高い地域です。アメリカ、南米、オーストラリア、ヨーロッパの国々の幸福感が高いということがわかります。

しかし、これ一体これでいいのだろうか。要するに、最大多数の最大幸福という考えに基づけば平均値が高いところの方がいい国だということが言えるかもしれません。でも、もしかすると平均だけ見ているとわからないこともあるのではないかということが言えるのです。これ当たり前のことなのですけれども、個人というのは集合を構成している要素

です。集合というのは、個人の集積物なのです。一旦でき上がった集合は、今度は個人の環境になります。例えばこういうふうに個人がどこかに所属している。それが小さく、小さくなっていって、一つのこうしたある種、例えば県みたいな単位を形成することになります。ここに何となく文化というのが生まれてくることがあるわけです。

私自身の文化心理学の研究というのは、こういうマクロな環境、例えば砂漠であるとか、いわゆる里山であるとか、都市部であるとか、こうした社会環境であるとか、あるいは習慣、制度、広く、広く文化みたいな、これが心ですね、この中に暮らしている人たちのそれぞれの心にどういう影響を与えているか、こういうことを研究してきました。

この心に与えられた影響というのは、例えばこの人がここにいて幸せだなと思うとしますね。そうすると、この人というのはこの環境を守ろうとすると思います、いい環境だと思っていれば。そうするとこの環境というのが中で再生産されることになります。ところが、もしここの人がしんどいな、ここと思ったとします。そうすると、この人はこういう環境を保つことに対してあまりよくないなというような行動、例えば投票行動なんかを見て反対することをするかもしれません。このようにして心の状態と環境というのは、お互いに循環しながらつながり合っているというふうに考えられています。

そうした中で、一つ手がかりになるのが個人とマクロの環境の間にあると考えられる資本という考え方があります。私は心理学者なので、あまり資本という考え方に対してそんなに明るくもなければ、ちょっとよくわからない部分もあるなと思うわけですけれども、でもその地域のマクロ、マイクロの関係で考えると非常にわかりやすいわけです。例えば物的資本、インフラが整っているとか、経済状態が良いというのは、まさにマクロ、環境要因が影響するものの一つです。

それから、自然資本ですね。自然の豊かさ、例えば県の中ですごく自然な豊の地域とそうでない地域があります。自然が豊かなところに住んでいる人は幸せかどうかみたいなことを測定することもできます。

そして、もう一つが社会関係資本と言われるものです。これがつながり、いわゆるつながりです。これはちょっと不思議な概念で、つながりというのは最初のイチロー・カワチの研究で話しましたように、みんなが信頼し合っている地域、お互いに風通しの良い地域と風通しの悪い地域みたいに環境要因としてもつながりの資本というのはあります。一方で、そのつながり、その資本というのは自然の豊かさみたいなものとはちょっと性質が違いますよね。一人一人が参加をするものです、つながるというものは。つまり、自分自身の個人の持ち物にもなっているわけです。この社会関係資本というのに注目をしていくと、ちょっとおもしろいことがいろいろ見れるのではないかと。かつ結構生かすことができる伸びしろを持っていて、大都市の東京のような生活とは違う軸が新たに出てくることがたくさんあります。

この社会関係資本という概念なのですけれども、そもそも定義というのは個人間のつながり、すなわち社会的なネットワーク及びそこから生じる互酬性と信頼性の規範というふうに書いております。要は、お互いに信頼し合って、お互いに安全かどうかみたいなことを見守りあったり、あるいは困ったときに手助けをする、そういうふうな基盤みたいなものだと考えてください。物的資本や人的資本と同様、個人と集団の生産性に影響するというふうに言われています。例えば端的に言うとみんなで一緒に何かをして一人ではできな

いようなことをやるみたいなパターンがあれば、みんなで集まってわいわいと楽しむことによってストレスを解消するみたいな、そういう意味での集団としての部分もあります。

このつながりが大事だという中で、一方で自立性というのも重要な概念だと思っています。これは、つながりが強くなればなるほど失われがちなものの一つだからです。自立性というのは、個人が個人として意見を述べることができる土壌です。例えば余りにもつながりの規範が強過ぎれば自分が大きな声で何かを言うということはとても難しくなって控えてしまうということが存在します。つながりにからめとられ過ぎないようにある程度自分の自立性を保つようなことができるようなことというのが新たな地域圏のつくり方として非常に重要なのではないかと。特に日本では、このソーシャルキャピタル、つながりと自立性というのは両立しないと考えられがちです。実際にあまり両立しないのです、あのデータを見ていると。例えばソーシャルキャピタルはすごく高くなると、やっぱり意見を自分は言わないというのが増えます。あるいは逆に自立性がすごく高い人ばかりが集まった会社とかがあるのですけれども、そういうところでは社内のソーシャルキャピタルが結構低かったりします。つまり、ここの両立というのがなかなかできないと思われがちなのです。私は、先ほどまでアメリカではこうですみたいな話をしてきたときに日本と余りにも違うという話をしたのですけれども、アメリカのうまいなと思うところは、このソーシャルキャピタルと自立性というのは結構うまく両立しているところです。つまり、個人は自立的に動きながら、自分の意見を言いながらも人とのつながりというものに関してかなり熱心に探索をするということがあります。パーティー好きだったりするのはそれの一つの現れなのですけれども、両立すると考えられています。自立的な人の方がむしろソーシャルキャピタルをたくさん持っている人だみたいな考えられ方がしています。この二律背反性みたいなものをどのように解消していくのかということも、また個人の集合を考える上ではちょっと大きな問題意識なのではないかと考えています。

この中の関連ある事例をちょっとお持ちしたのですけれども、岡檀さんという方が「生き心地の良い町」という研究をしています。これすごくおもしろい本なのですけれども、徳島県の海部町という自殺率の低い町でいろんな調査を行っていて、逆に日本のある町、どことは書かれていないのですけれども、自殺多発地域Ａ町というところがあって、ここと比べられているのですけれども、例えば見知らぬ人であっても信頼するというのはこの海部町の方がパーセンテージが高いのです。ところが、例えば隣人と日常的に生活面で協力しているとかというのは、圧倒的にこの自殺多発地域Ａの方が高いわけです。つまり、非常に密着したつながりがあるわけです。逆に立ち話程度のつき合いというのは海部町の方が高いわけです。それから、地域のリーダーを選ぶ際に学歴を重視するところも結構このＡが高かったりして、結構依存的になってしまうわけですね。偉い人が上に来てもらった方がいい、自分は何も意見を言わなくていいのだというふうになってしまって、どうしてもつながりにからめとられるパターン。海部町はむしろそういうことはなくて結構薄い、緩いのだけれども、何となくつながっていて、監視し合うという状態ではない。これというのは結構ソーシャルキャピタルと自立性というものをうまく反映している部分なのかなというふうに思っています。そう考えますと、地域調査をやる上では、地域の風土みたいなものですね、例えばつながりとか、縛り合いみたいなものになっていないかどうか、あるいは風通しのよいつながりができているかどうか。もちろんそういうのは生業、例えば

農業地域か、どういう地域かによっても違うでしょうし、人口密度の高さ、低さみたいなものでも違うでしょうし、このマクロな要因と、それに関して個人が持っているいろんな性格であるとか、志向性であるとか、そういうことがどんなふうに関連し合っているか、この２つをかけ合わせて見ていくということが恐らく重要になるのだろうと思っています。

私自身が今地域の集合的幸福という研究をしていまして、フィールドとしては京丹後市と京都市をやっているのですけれども、まさに住民が自立性を持ちながらも適切につながりを持ち、幸福が相互にお互いに関与し合う、つまり奪い合いがない状態が発生し、地域への活動、住民の幸福が高まる地域社会というのがどのようにでき上がっていくか、こういうことを考えて研究をしています。

その中でやっているのは、例えばあなたはどのぐらい幸せですかという聞き方をする設問と、それから町内の人はどれぐらい幸せだと思いますかと、この２つの質問をしていて、これがどれぐらいお互いに関連し合っているかというのをチェックしています。もしかするとすごく社会関係資本が高い地域においては、お互いに幸福というのが依存しやすいのではないか。つまり、隣の人の幸せというのは自分にとっても幸せである、周りが幸せだと自分も幸せと。一方で、もしかするとソーシャルキャピタルの低いところになると自分の幸せは自分の幸せ、隣の人の幸せは関係ないよねというふうになるかもしれない。そう思いまして、実際に研究をしたところ、集合的な幸せ、ここのバーが高ければ高いほど自分の幸せと他者の幸せが相関しやすい、つながっていやすいものだというふうに考えてください、ざっくりいって。これが何によって支えられているかというと、町外や集落外の人との交流、町内や集落内の人との交流、異世代との交流につながりが、中の人だけではなくて外の人ともつながっていて、しかも多様な人とつながっている、そういう地域、そういう人が多い地域の方が要するに自他の幸福というのが関連しやすい、ちょっと複雑なデータなのですけれども、そういうふうになっていることがわかりました。

つまり、自分の幸せというのがほかの人の幸せとは切っても切れない、まさにつながりがあるような集合的な幸福の状態というのが排他的な、要するに周りの人とだけつき合っています、ほかの人とはつき合いませんみたいな状態ではなくて、いろんな人といろんな多様な他者の意見を聞いている、そんな風土が生まれている地域というのは、やはり個人の幸福とほかの人の幸福というのがきちんと理解したものになりやすいということがわかりました。

まとめますと、経済的な基盤みたいなものはもちろん重要で、これは働く場所や居場所みたいなものをつくる、非常に基礎的なものであると思います。その上に、やっぱり地域の愛着というのはきちんと積み重なっていて、その場所で身を立てられることというのは心のゆとり、これは自然環境の上の評価みたいなものにつながっていくだろうと。やっぱり外から見た魅力と中の人の幸福を支える柱というのがもしかしたら違っているかもしれないのだけれども、こうしていろんな人と交流することによって、新たにうちの県はこんなにいいところがあったなみたいなことを気づくことができる。そうした中で、新たな共有価値みたいなものを私たちは目指していって、地域に対する愛着や幸福を知ることができるだろうと考えています。

あともうちょっと、最後の、あまり時間がないのですけれども、震災についてできればお話した方がいいかなと思いますので、東日本大震災、もちろん幸福に関して言うと大き

な影響があったと思うので、これについて少しだけ触れたいと思うのですけれども、人生観や価値観が震災後に変化したかどうかというのを聞きました。そうすると、変化した人というのはすごく多かったのですけれども、その内容というのは特に結びつきが重視ですね、あなたの普段の、今まで普通だと思って、当たり前だと思っていた日常生活に対してもう一度見直したいとか、あるいは家族で地域に感謝をしたい、こういう考えが非常に災害の後に増えていることがわかりました。

ちょっと飛ばしますと、実際に関係性をリソースとするような意識が非常に強まったというのが事実として挙げられます。ただ、若年層の調査だったので、震災にすごく共感的だった人たちとどうもそうでなかった人たちがいたと、被災地域以外の人たちに関して言うと。共感性が高かった人たちというのは、もともと幸福度が高くて、やっぱりすごいいろんなちゃんと心理的なキャパシティがあった。そうすると、被災地とともに悲しむ、悲嘆に暮れるみたいなこともできて、かつ自分の今ある状況というのにもう一度感謝しようと、逆に幸福度を高める傾向もありました。

でも、被災地域についてあまり共感性がなかった人たちというのも半分ぐらいいて、こういう人たちは全然自分たちの幸福度は変わらない、震災というああいう大きな出来事があっても変わらないというようなことがありました。

一方で、逆に東北の中での調査を見ていくと、もちろんやっぱり震災について思い浮かべるところのイメージのビビッドさが多分違うので、本当に実際に被害を受けている方が多数いらっしゃる中で、地震について想起した人というのは幸福感が下がってしまうけれども、地震についてあまり考えなくて済んだ人というのは幸福感がフラットというふうに、被災地域とそうでない地域では結構隔たりみたいなものも、パターンの違いみたいなものもありました。これは、震災直後の調査なので、これが震災前、震災後のデータで幸福感が上がったか、下がったかみたいな研究していたのですけれども、これについてもっとフォローアップ調査みたいなことがこれからもなされているのではないかなというふうに思います。

まとめますと、幸福の意味というのは一律ではない、それぞれの国や地域での幸せのあり方を考える必要があるだろうと。住民の幸せが何かを考えることは、やっぱり地域において非常に重要な意味を持っていて、ランキングのためではなくて、要因を検討し、変化を予測するために必要だろうと。一方で、綿密な分析も必要で、ただ何となく平均点を並べただけでは情報化されていないですね。具体的にどういうものが何と関連しているのかということを調べていくことが必要であろうと。

それから、集合と個人の関係性というのは非常に重要だと思います。ともすれば幸福というのは個人だけの問題ということで、政策なんかで使うということと、ある意味自分が幸せかどうかは自分の問題なのだから放っておいてくれみたいに言い出されることが結構あるのですけれども、やっぱりそうではない。人の、個人の幸福を支えているのはマクロないろんな制度や要因や、いろんなことが支えているのにほかならないので、それをきちんと分析することによって、それは翻って個人の幸せにもなってくるかなと。幸せな個人というのが、今度きちんとした良い集合というのをつくっていくことが言えるのだと思います。

また、今日はあまり触れられなかったのですけれども、震災の関係とかを見ていても、

自然の驚異みたいなものに関してどういうふうに私たちがレジリエンスを持っているのか、そこに関与しているのは結びつき、つながりみたいなものが非常に重要な価値を持っているのではないかということで、このつながりを活用していくことというのはとても大事だろうというふうに思っています。

個人の幸福だけではなくて、やっぱり持続可能な社会に向けた発想というのが大切だと思うのですけれども、こうした中で岩手県の幸福度調査に非常に期待できるものというのが、岩手県ならではの豊かさを検討しようとされているということで、知事も個人の幸福と世界の集合、全体の幸福、この両立とバランスの問題が重要なのだと講話の中でおっしゃっておられていて、個体性と集団の両立、これが目安なのではないかと。これはこういう視点というのは今までの調査でもなかなかなかったのではないかなと思っています。これは、もしかするときちんと集団から個人までのグラデーションの中で幸福の要素を知ることができれば、これが一体どういう政策を、どこに向けているのか、個人に向けて打つのか、あるいはある集団に向けて打つのか、いろんな影響を考えられると思うのですけれども、こういう施策の展開に活用できるのではないかという、こういう重要な意味があるのではないかなということを考えております。特に岩手県、これ個人主義得点というのは、日本の中での分布みたいな図があってちょっとおもしろいかなと思って持ってきたのですけれども、例えば高知県とかはすごい個人主義で、鹿児島も個人主義、北海道も個人主義、白いところは個人主義なのですけれども、東北、岩手県も含めて個人主義得点が低い。つまり集団主義的なのです、つながりが高い。これ何で測定されているかというと、実は流動性なのです。個人主義得点が高いところというのは、いわゆる離婚率とか共働き、転職率とかすごく高くて、いろんな人が流動的にどんどん、どんどん新しくかかわっていこうとするところなのではないか。むしろ、似たような人とずっとおつき合いが長く続くところというのがこの黒いところなのではないかと思います。こうしたものをうまく生かすことというのがもしかしたらできるのではないかということを考えています。やっぱり個人というのは集合を形成していると。いろんな個人だけで見ていくと、例えば幸せに健康が関係していると、健康であればあるほど幸せな人が高いですと見ることができるのですけれども、集合レベルでこういう話が、ある地域、いろんな地域があるけれども、健康度が高い地域だとか集合だとか見ることができるし、やっぱり個人と集合、両方で見ていこうとすると、ある個人はある県の中に、あるいはある市の中に、ある町の中に、その中でそれぞれが求める幸福がもしかしたら違うのではないか、こういう視点からも研究が実際に進んできて、これが実際の施策みたいなものにきちんと反映されていくと非常に有用な議論もたくさんできるようになるのではないかなということを考えております。

大体私の用意したものというのはこのあたりになりますので、一旦ここでとめさせていただきたいと思います。ちょっと最後は駆け足になって申し訳なかったのですけれども、どうも御清聴いただきありがとうございました。（拍手）

○岩渕明会長　先生どうもありがとうございました。まだ 10 分ほど時間がございますので、委員の先生方、御質問等がございましたらお願いしたいと思います。

はい。

○谷藤邦基委員　大変興味深い御講演をありがとうございました。正直申し上げて、全部はまだ理解し切れてないのですが、ただ先生がいろいろお話しされた中で集合的幸福というお話をされていますね、これは非常におもしろい表現であるなと思ったのです。実は私も県の幸福度指標の研究会の委員を仰せつかっていまして、いろいろとこれから考えていかなければならないところではあるのですが、そういった中で予備的な議論をしていく中で、個人、個人の理想的な幸福とは別に社会とか世の中とか、そういったものの幸福感というマクロ幸福というがあるよねという議論もこの間していまして、そうすると集合的幸福というのは非常に親和性のある考え方かなと思ったりもしております。

それで、要はそれでそれをどうやって測っていくのかというあたりまで考えなければならないのが私らも非常につらいところでありまして、例えば経済学だとミクロとマクロとなって、マクロというのはミクロ的な数字の集計なのですよね。だから、アグリゲイトディマンドとか、総需要とか言ったりするわけですけれども、ただ果たしてそういう集計されたものとして全体の幸福感が出るのかというとどうも違うような気がしていました。

それで、集合的幸福というのが多分英語で言うとコレクティブ・ハピネスという表現されているかと思うのですけれども、その辺ですね、先生のお考えとしては、一人一人の幸福感みたいなものが集計されて、ないしは平均値をとった結果としてコレクティブ・ハピネスというのが測れるという認識でいらっしゃるのか、それとは全然別に全体をぱっと捉えて、何か測定できるものだというふうにお考えなのか、その辺をちょっとお伺いしたいのですけれども。

○内田由紀子氏　大変重要な御指摘をいただきまして、ありがとうございました。

そうですね、１つは状態として捉えられないかどうかですね。例えば、幾ら幸福度をとって、その平均点の集計、集積になってしまうので、１つの値しか出てこないわけです。そこに生じているさまざまな個人と集合の関係というのは非常に見えにくいのではないかと、そういうこともあって、先ほどちょっと御紹介させていただきましたとおり、自分の幸せと他者の幸せというのがどれだけつながっているか、こういうものも一つの指標として捉えられるのではないかということを考えています。ただ、それは単に今まで平均点しか見れてなかった部分に情報を追加するという状況ですね、つまり平均点も情報化は一応ちゃんとあると思います。平均点と、それから格差ですね、ジニ係数みたいな形で、例えば幸福格差というものを計算することはできると思います。さらに、それから幸福がつながり合っているか、伝播するかどうか。ある人が幸せなときに他の人が不幸な状態にないかどうか、あるいはある人が幸せなときにきちんとそれが他の人に伝わっている状態になっているかどうか、こうしたことを捉えることができないかなと思って、状態として捉えられないかなと思っているのが一つです。

もう一つは、最近マルチレベル分析を結構やっております。これ何かといいますと、私たちの研究で 31 市町村の 160 集落ぐらいサンプリングして調査を行ったのですけれども、その一人一人の幸福度というものを一体どういうものがもたらしているのかというさまざまなレベルで分析をしています。ここにあるのは個人の得点です。例えば幸福度が高いところというのは実際自尊心が高いところであるとか、集団主義が高い人とか、社会関係資本、人とのつながりを持っている人が幸福度が高いということがわかりました。これ個人

レベルの話なのですけれども、ここに一つは客観指標として、市町村レベルでいろんな指標がありますね、例えば就業率とか、離婚率とか、いろんな、あと図書館が何個あるとか、病院何個あるとか、いろんな指標を 114 個ぐらい集めてきて、これを全部モデルに投入をして、どこの客観状態というものがここに住んでいる人一人の個人の幸福度を説明するかどうかというのを研究していました。

あるいはこれは市町村の自尊心と書いているのですけれども、これはまさに市町村ごとで個人のとった自尊心の値を集計して、まさにアンケートして、いろんなたくさんの指標を入れて残ったものがこれだけだったのです。このときには、つまり客観レベルではどうやら住んでいる町に結構小学生がたくさんいること、これ小学校教員 1 人当たりの児童数ですけれども、これが残りました。いろんな労働状況とか、経済状況とか、たくさん投入したのですけれども、この辺は統計的に消えていきました。つまり、子供が多い町に住んでいる人は幸せであるということがわかったわけです。

それから、市町村の自尊心がすごく残った、不思議なものだったのですけれども、これは本人が自尊心が高いかどうかにかかわらず、とりあえず住んでいる人みんなが何となく私はちゃんと全体的に自分に満足できているなというような人が多い町、こういう誇り高い町に住んでいる人というのは幸せ、自分がどうかは別にして、とにかく幸せであるということがわかりました。この青の要因というのは場の要因ですね。こっちが個人の要因。そうはいっても個人がいろんなつながりを持っていることが自尊心が高い、規範意識があることというのが幸福につながるということがわかっています。

やっぱりもしかするとこういう客観的な指標と主観的な指標と組み合わせてこうやって分析していくためには、ある意味マルチレベル分析という、要するに個人差だけを見るのではなくて、その市町村レベルの差みたいなもの、このときは 31 なわけですけれども、そういうものも加味して分析できるような方法をとっていくと結構見えてくるものがたくさんあるかなというふうに考えています。ちょっと統計的にはテクニカルなことがいろいろあるのですけれども、実際に確かに見てみると、こうして子供がいることは大事なのだなとか、いろんなことを実際に情報としては価値があるかなというふうに思っています。

ありがとうございました。

○岩渕明会長　もう一人ぐらいお聞きしたいと思いますが、いかがでしょうか。

今我々も地域で豊かさ指標であるとか、地域を愛する、そういうことで誇りを持とうというのが一つ考えとしてあります。そうした時に、客観的にこれと幸福度、今の状態の幸福度とこの関係は連関しますよというのはわかるのだけれども、施策の上で例えば幸福度を上げていくというところになると、こちらの社会的環境をうまく工夫することによって、というようなことになるのですか。

○内田由紀子氏　ありがとうございます。恐らく施策を実際に打っていくとなると、例えばあなたは自尊心を感じなさいというのはすごく難しい話になるのですよね。でも、そうではなくて、例えば個人の何かを支えているものの中に実はこういう環境的な要因があるのだとすれば、そこに働きかけていくことというのはとても大事なのではないのかと、そういうことが見えてくると実際の政策みたいなところに生かしやすくなるかなというふう

に思います。

あとは、これはちょっと平たくやってしまっているのですけれども、例えば高齢者と若者ではもしかするとこの成り立ちみたいなものが違うかもしれないわけです。あるいはまさに過疎化が進んでいる地域とかになっていくと、子供の声が聞こえるのはすごくいいことだみたいになるかもしれない。だけれども、そうでない地域だと、最近東京とかで問題になっている保育園が騒音みたいな話がありますけれども、ちょっと悲しいですが。逆に子供の声がそんなにうれしくないみたいな地域が出てくるかもしれないですね。そうすると、どういう人口構成の人たちに何が重要なのかということの分析みたいなことをしていく上でも丁寧な分析をすればこうしたことが見えてきてどういう施策を、どういう人たちに使えば有効なのかということにも活用できるのではないかなということを考えております。

○岩渕明会長　どうもありがとうございました。我々もこれからいろいろと議論を行い、10 年後の岩手を考えていくときに、このようなパラメーターであるとか、指標あるいはそれを基にした政策を提言していくというようなことになろうかと思います。先生のさらなる学問的な発展をお祈りしまして、ぜひ頑張っていただきたいと思います。また、その成果をフィードバックいただければと思います。

この後、先生は京都に戻られるため、ここで退席となります。もう一度拍手で感謝の意を表したいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

○内田由紀子氏　どうもありがとうございました。

○岩渕明会長　それでは、意見交換に入りたいと思います。これから残り時間 1 時間弱でございますが、ただ今のご講演も踏まえ、皆様から今後の岩手の 10 年あるいは今の感想等も含めて、お 1 人 3 分程度ということでお話し頂きたいと思います。岩手をどうしていったらよいかというようなところで、それでは青木委員の方から順次時計回りで行きますので、よろしくお願いします。

どうぞ。

○青木幸保委員　大体最初に始まる、どういうふうにやるかによって、なかなか次々と変わっていくような気がするのですけれども、そういう意味では重要なトップバッターになったのですけれども、初めて参加というか、委員にということでなったのですけれども、どういうふうにリンクするかはわかりませんけれども、まずうちの方の町のことをちょっとお話ししたいのですが、まさに今地域が自信を持とうよということが原点のようなのですが、いずれ私たちの町では、特に今ここ十数年になるのですけれども、小学校の子供たち、まだ幼稚園の子供たちから平泉学といって、まずはまさに地域をみんなで知ろうということで、年代、年代、ずっとここ十数年やってきたのですが、いずれその子供たちももう社会人になっているのですけれども、幼稚園の子供たちは中尊寺で行われている謡を習っていますし、そして小学校になると、いろんな平泉の歴史を学ぶ。中学生になると、今度はその学んだことを修学旅行とか、いろんなところで平泉を自分たちで首都圏に行って

も案内できるくらいの、紹介できるくらいのそういう力を持ってきています。それは、やはり地域をきちっと知り、それを紹介することによって、逆に今度自分たちの町がどういう町であるかと、そういった中に５年前に皆さん御承知のとおり、皆さんのおかげでなのですけれども、世界遺産登録になったのです。

あと登録になって、それを今度自分たちの町をどう発信しながら、最近もよく中学生との懇談でも言われたのですが、私たちはこの町が好きで、最後はここに戻ってきたいのだと。ただ、働く場所がない、どうぞ町長さん、働く場所をつくってください。そうしたら、私たちは絶対戻ってきますと言われたときには、本当に頭をたたかれたような感じがしたのですけれども。

そういった意味では、文化を大事にしながら、もう一つ仕事場といいますか、働く場所、そういったものがひとつリンクしていかないと子育て環境もまさにひとり暮らしの老人が安心して暮らせるような町をこうやっていくために、そういった意味では文化というのは、文化を知る、文化を自分たちのものにするということは非常に大事なことだということを特に思っています。

私は議会におったときは、今からもっと古い時代なのですけれども、こんなことを言っては失礼ですけれども、文化で飯が食えるかなんて言われたときもあったのです。しかし、やはり文化で飯も食えると思うし、もう一つ心の豊かさというか、先ほどの幸福度の話なのですが、非常に大事なことだろうということだということを、特に今回東日本大震災でいろんな緊急的な発掘調査もやったのですが、この中で陸前高田、釜石、全国から緊急発掘で来ていただいたのですが、その中でもやはり仮設住宅つくるために、こんなに大変なときに発掘調査なんだと言われたこともあったそうであります。しかし、それは国はきちっと発掘調査をして、そして遺構を確認して、そして保存したり、何したりしたわけですから、それをしながらやったことというのは、実はそこへ来て緊急発掘調査した人が地元、例えば函館に戻ったり、広島に戻ったりしたその発掘調査員が、今でも現地に行って三陸沿岸の方々と交流しているそうなのですが、やはり被災したあのときに、夜になると発掘調査はないわけですから、地元の人たちと話したときに、やはり地元の人たちはこういった状況の中でも文化といいますか、そういうものをきちんと胸に刻んで、それを支えにして生きているのだなということを感じて、今調査やっているという、そういう人たちも話も聞きましたが、まさに私は幸福度をやる一つの所以は、地域の文化とか、そういう歴史文化をきちんと学ぶ、伝える、それが未来に伝える幸福度を感じるものにつながっていくのではないかというような思いで、ちょっと長くなりましたが、以上であります。

○岩渕明会長　どうもありがとうございました。

浅沼委員よろしくお願いします。

○浅沼道成委員　わかりました。

実はお題をいただいたときになかなか浮かばなかったのですけれども、今のお話、講演を聞きながら考えておりました。いろいろ支離滅裂かもしれませんが、まさに地域への愛着かな、地域への愛着なのだろうなと。私自身も岩手に住み、盛岡に住みながら地域愛着を持っていて、なかなか本気で考えていないし、表せていない。それは自信がないという

言葉につながっていたのかなと。自信を持たすというのはなかなか難しいのですが、今ではやっぱり岩手の中で余りにも外のところから近代化であったり、都市化であったり、あるいはグローバル化だとか、いろんなものが入ってきて、何か知らないうちに乗っけられて、岩手らしいところのスローなというか、そういう生活が何か一変してそっちに引っ張られてしまったなと、それをそろそろ戻していくというか、もう一回考えなければいけないのかなと。まさに岩手県の基準があるのだろうなと、その基準を外の力の基準に合わせてしまったのかなと。もう少し、例えば最近スポーツクラブですと高齢者の方がすごくたくさんいらしているのですけれども、お金がかからなくて一日過ごせるような社会であればいいのかなと。だから、お金がかからないでいれば、それこそ幸せなのかな。何となしに楽しみがある。

という中で、スポーツやっていたから言うと、岩手にいながらドキドキするような感覚が日常の中でドキドキがあればいいのかなと思うのです。ドキドキすることを外に求めに行くような気がします。岩手にいながらもドキドキすることが感じられる。例えば熱くなるような環境が時々岩手でも感じながら、また日常の静かな、お金のかからない日常があってというようなことが本当は岩手らしい生活なのかなと。それを政策としてどう進めていくのかなと。

もう一つ、若者の人たちが仕事がないという中で、いろんな可能性を秘めているはずなのにその選択する選択肢が、外でいろんなところで事例があって、農業でこんなことができて、といったことがあるのだけれども、何かでも実際よくわからない。もうちょっと若い人たちが岩手に帰って、岩手の中で仕事が選べるといった、いろんな選択肢があって、それがわかりやすくて、やってみたいなと思うような政策というのですか、その辺の中がよく見えないからなかなか戻って来られないのかなということ。

もう一つ、先ほどちょっと言いましたけれども、要するにそういったいろんな外の力を政策が一口に取り上げる必要もあるのかなと。あまり政策もそっちに乗っかってしまっているような気がするのです。焦らず、岩手らしいような政策、岩手基準のような、それは幸福度なのかわからないのですが、そんなことをしていったらどうだろうかなというふうに思います。

そういう意味では、先ほどちょっとお話のあったような仕組みを、岩手らしい仕組みを平均的につくるのではなくて、ちょっと思い切り重点かけて一個一個確実にしていって、岩手らしい基盤づくりする政策がいいのかな。何となしに何でも網羅的にやってしまっている感じで、どれも結果が生まれていないのかなというのが気になりましたので、そんな政策の方法を持たれたらどうかなと思いました。

以上です。

○岩渕明会長　ありがとうございました。

次に、五日市委員よろしくお願いします。

○五日市知香委員　どんどんプレッシャーがかかってきていますが、私はきょうは３分ということでしたので、もう事前にまとめてきたので、そちらを読ませていただきたいと思います。今後の岩手県に思うことということでちょっとまとめてきました。

復興工事が進んで沿岸の各市町村は最後の仕上げに入ってきています。その中で、取り残された感がある被害者や、次の手が打てない高齢者など課題もまた次々と浮かび上がってきています。言葉で幸せを求めようと話しても届かない面は当然あるので、とてもそれは難しいことだとは思います。

その中で、小さなことでもこつこつと取り組んで成功事例を地道につくっていくということが必要ではないかなととても感じています。例を挙げればなのですけれども、今後期待できるのはＪＲ山田線の一部、宮古と釜石の復旧が終われば、その鉄道を三陸鉄道に移管されて、三陸鉄道は南リアス線、北リアス線とつながり、総延長 163 キロの日本一長いローカル線が誕生します。復興のシンボルのように評価されている三陸鉄道なので、このことは沿岸の人たちへの応援と、そして大きな希望につながると思います。また、行政もそれを応援して、全国の話題を発信し、交流人口の拡大へつなげていくことが必要ではないかと思います。

交流人口の拡大は観光客を増やすというようなことに言われていますけれども、こと三陸沿岸に関しては津波被害の研究者や工事関係者、あとボランティア、被害地巡礼の人たちまで全て交流人口となります。大きな枠と企画によって、ここだけの魅力を立ち上げて人を呼び込み、また地域の商品を発信していくことが明日の幸せにつながってくるのではないかなと思います。とにかく人が集まる、にぎわいをつくっていくことが三陸、そして岩手の幸せにつながるのではないかと思います。

同時に 106 号線の高規格化とか、釜石道路などの内陸と沿岸の交流の活発化も大事な要素になってくるのではないかなと思います。

以上です。

○岩渕明会長　どうもありがとうございました。

次は、伊藤委員お願いします。

○伊藤昌子委員　まず初めに、資料を３部配っていただきました。そして、先ほどの先生のお話を聞きまして、私どもは被災に遭いまして、新しく地域コミュニティーというのを再生するに当たり、地域の特色というのを、とにかく丸ごとなくなったので、そこをやはり重点に思い起こしております。活動の中でも様々な家庭を支援しておりますので、食育から、防災、大隅のつどいの丘商店街ということで地域と連携しイベントするとか、お出かけ広場ということ新しく立ち上がったコミュニティーに出かけていくなど特色を生かした地域づくりというのにも貢献しているのではないかと思っております。

被災がありまして、子供たちを取り巻く社会環境の変化も著しく、健康、教育、文化など、あらゆる面でのフォローが必要になってきております。陸前高田市、ひいては岩手を愛する気持ちとこの地で生まれ育つ、この地を選んで育つという愛着や誇りを持てるような環境づくりそこがやはり重要なのではないかと感じております。

今年度新しく岩手県の方で結婚相談所を立ち上げられまして１組のカップルが誕生したということをお聞きしまして、私も大変うれしく思っております。本来ならば 2017 年４月に消費税が上がる予定だったところを国が延長されました。その中で、やはり医療や年金、何より育児支援の社会保障を充実させるということが資金が延期されたということだった

ので、期待していたところだったのですが、少子高齢化が進み、そういうところの施策が本当に大事なのではないかと思っております。結婚した人の子供が生まれたらば２子、３子が生まれやすいような子育ての手立てを厚くする支援が、そちらの方が必要なのではないかと思っております。子供を生み育てやすい明るい未来へつながるように温かい人のつながりでそういう子育てする家庭を支え合って、大変な思いをしたけれども、ここで子育てしてよかったと思えるような地域の子育て力を高めるというところが大事なのではないかと思っております。

なかなか子供の数というのを、生んでくださいというのは個人の価値観によるので大変なのですけれども、子育てしやすい環境にするために、例えばなのですけれども、男性の働く職場の改善で育児休暇がとりやすい環境だったりとか、もうちょっと子育てしているお母さんたちがもっと子育てに時間がとれるような環境だったりとか、あと子供を生んだら仕事に復帰するまでの間、産後ケアのために子育て支援の環境の整備の基盤をつくるとかというところが一番重点に支援していただきたいなと思いました。

○岩渕明会長　ありがとうございました。

次は、遠藤委員お願いします。

○遠藤譲一委員　今のお話もありましたけれども、国あるいは県、市町村、地域を考えたときに、子供たちが出生数がどんどん減っていくというのが一番の問題、課題だと思っています。今の日本は、子育て、教育、医療、介護、全てにわたってお金が必要な国になっておりますので、そういった面で子育てをためらう、あるいは結婚をためらう、親と一緒にいると親の介護で大変なことになるのではないかと、そういう不安感が国中に蔓延しているというふうに思っております、ここのところをしっかりと国が全国どこに住んでいても、例えば子育ても大丈夫と、大学に子供が行っても奨学金であっぷあっぷしないような、そういう仕組みづくりをした上でやっていかないと、岩手県は平均所得が低い。低いのであれば、東京へ行った方が給料高い。高いところに行こうというふうな流れをなかなかとめられないというふうなところは思っております。

岩手はこれまでずっと貧しかったので、あるのかなと思っていたのですが、私も子供のころから、私は久慈ですけれども、久慈は何にもないところだと、田舎だし、不便だし、遠いし、町もぱっとしないとかずっと親から、周りの人から言われてきたのですが、今若い人たちが、若者がこの岩手に定住する、地元、生まれた町に残るといった場合には親の世代がもっといいところを語っていかなければいけないと思っています。

平泉町長さんからお話がありましたように歴史文化がしっかりあって、そういったものを踏まえて、勉強して自分たちの町のなりわい、暮らしのところを語っていかないと、ともすると今もマイナスの話を挙げる人たちが多いのです。震災がありまして、「あまちゃん」があって、全国からたくさんの方に来ていただいて、久慈はいいところだねと外の人から言われると、だんだん久慈の人たちもうちの町もいいんじゃないの、知名度も上がってきたし、たくさん来てくれるし、大分自信がついてきたのですけれども、本当にいいところ、どうやって自分たちの町がここまで続いてきたのかというのを大人がしっかり、高齢者含めてですけれども、これはやる必要があると思っています。

あとは大きな町のようなメニューがないわけです。お店にしても、遊ぶところにしても、ないのですけれども、それはそれとして、実はこの前、今年千葉の看護学校に行った女性、１年生の人に言われたのですが、戻るのであればワクワク感が欲しいですねと。ワクワク感というのが何かというのは、これはすごく難しいのですけれども、仕事があるだけではなくて、自分の生まれた町、学校が終わって、戻って、そこでもいいかなという、住んでいて、ここもいいなというこれがないと、仕事があれば戻るという選択肢にはならないと言われました。人の価値観はいろいろですけれども、町のいいところを見て、もうちょっと明るく、それには住んでいる人が自信を持っていくという、そういうまちづくりは絶対やらないといけないなというふうに思います。

以上です。

○岩渕明会長　どうもありがとうございました。

金谷委員お願いします。

○金谷茂委員　金谷です。私は毎回この会に出させていただいて話すことは、私は岩手県のＰＴＡの代表として来ておりますので、ＰＴＡに特化してお話をさせていただいております。

まず、先ほどの講演の中で子供が多い町に住んでいる方が幸福度は高いというお話もありました。ただ、何せ岩手県は少子化がどんどん、どんどん進行しておりますし、私が４年間、県の会長をやっておりますときにたしか県内で小中学校 50、60 ぐらいが閉校、統廃合をしてしまった状況があります。本当に地域からどんどん、どんどん子供たちの姿がなくなる、寂しい限り。ただし、その地域に住んでいる人たちは幸福じゃないかといったら、そうでもないのかなというようにも思いますけれども、ただやはり少子化というのは何なのといったらやはり活性化がされない。活性化がされないということは、ひいては例えば子供たちのクラブ活動もそうです、さまざまな学習体験もそうです、切磋琢磨なされないで自由気ままで、言葉は悪いです、そういった中での子供たちの教育ということではなくて、やはりある程度の規模の中でしっかりとした教育をしてあげたいなと、そのように思っておりますので、そういう社会環境づくり、こういったことをお願いしたいなというのが一つ。

それとこれはちょっと余談ではありますけれども、先生の働く時間が非常に長過ぎるという話がずっと出ております。先生になれば部活の顧問に必ず何かはつかなければいけない、あと自分の時間というのも、労働外時間がどんどん、どんどんそれにとられてしまう。先生たちの心労といいますか、大変なものがあるかと思います。しっかり我々保護者としてもその辺を考えなければいけないと思います。子供たちのクラブ活動、これだって親ができるところ、先生に負担をかけないところ、もしくはクラブ活動をしっかり休む日、ここら辺のところも踏まえながら、しっかりとした学校の先生と保護者、地域、こういう連携がしっかりと培われる中で、すばらしい地域、そしてすばらしい子供づくり、そしてすばらしい子供が大人になり、そしてすばらしい地域が育っていくというような一連の流れになれば非常にすばらしいのではないのかなと、ちょっと雑になりましたけれども、以上そのように感じております。

以上です。

○岩渕明会長　どうもありがとうございます。
では、神谷委員お願いします。

○神谷未生委員　神谷です。よろしくお願いします。
私は、ここの会から初めてこういうのに参加させていただいて、そもそも私の勉強不足だったのですが、岩手の幸福に関する指標の研究会というのを県がやっているということすらも初めて知ったような状況で、この資料を先週いただいて、きょう初めて内田先生の講演等もいただいて、逆に県がこういう活動をしているというのをすごくうれしく思いましたし、達増知事始め関係のある県の方々にありがとうと言いたいことと、私は岩手の方言がないので、おわかりのようにＩターン組なのですね、震災の後に大槌町の方に最初は支援という形で入って、今は大槌の男性と結婚して、子供もいてということで、全く意図せずに岩手県にＩターンしてしまった人間なのですけれども、岩手に来てよかったなと、今日の講演だったり、こういう会があることについて、改めて思いました。
そこでのお話になるのですけれども、うちの団体は企業研修だったり、修学旅行の受入を大槌町から委託を受けて行っている団体なのですけれども、そこでうちの団体にいる22 歳の若手の語り部ガイドの子が話していることとすごくリンクするなと思って御紹介すると、復興というのは何ですかと結構ガイドの方からも、県の方からも聞かれることが多くて、皆さんもそれぞれ復興の定義とは何だろうと、震災を契機に特に県の方々は考えたことがしょっちゅうあると思うのですけれども、私たちが思う復興の定義というのは普通を戻すことだと思っているのです。皆さんが今当たり前だと思っていること、ただいまと帰る家があること、「ただいま」と帰って、食卓に御飯が出ていること、家族が一緒にいることとか、それが戻せなくてすごく困っているというのが沿岸の状況であると思っていて、だから普通であることが幸福に直結している。
今内田先生のお話を聞いていて、アメリカというか、欧米型の幸福と日本の幸福というのは指標のあり方が違うのではないかと、欧米は割とドキドキ感、ワクワク感を中心に幸せの考え方だけれども、日本人は穏やかなところに幸せを感じるというのは、震災を経験した沿岸の地域の人は割と直に感じているのではないかなと思うので、岩手の幸福に関する指標の研究会とかでも「幸せ」という言葉というのは日本人とか、特に岩手の方、東北の方は、私は外部から来たので思うので、使わない言葉だと思うので、ちょっと距離感があるというか、私は幸せですと日本人の人が言うのはちょっと遠慮があるというか、言ってはいけない気がするのですけれども、普通であることに幸せを感じている人というのは非常に多いのではないのかな、そこがさっき内田先生のおっしゃった言葉だと穏やかさにつながっていく。だから、そこをちょっと鑑みて、研究等を入れていただけるともしかしたら岩手県の方々が感じている幸福に近いものを指標に立てられるのではないのかなというふうに思いました。
もう一点、その点でお話しさせていただくと、さっき先生の方で年代別で幸福の感じ方が違うというのをおっしゃっていて、そこも当然そうだと思うのですけれども、あとそこにさらに男女別の視点というのもぜひ取り組んで、男性が感じる幸せと、当然女性が感じ

る幸せ、特に若い世代の女性の感じる幸せというのは非常に細かく分類されていくと思うので、そこもぜひぜひ織り込んでいただきたいなと思いました。

あと２点になるのですけれども、人口ビジョンの方で出生率の方の問題が話されているのですけれども、大槌町は、私の素人目線、大槌町内に住んでいての話の理解なのですけれども、大槌町は出生率が上がっているのです。私は実は去年出産しているのですけれども、あのちっちゃい大槌町で私の息子が生まれた７月に 10 人も子供が生まれていて待機児童になってしまったくらいの事態に陥っていたのですけれども、１月から入れたのですけれども。なので、そういった出生率が上がっている市町村もあるところで、別に大槌町の悪口を言うつもりは何もないのですけれども、まだ町の方で分析について一切手が回っていない状況なのです、当然ほかのことで手いっぱいなので。ただ、岩手県でも、ほかの市町村でもそうやって出生率維持できているところ、また増加しているところというのはあるのではないかと思うので、その辺の分析もぜひしていただいて、人口ビジョンの方に盛り込んでいただけたら、参考にしていただければなと思います。

あと以前にお話ししたこともあると思うのですけれども、私はＩターン組で、実は沿岸地域にＩターンの方というのは非常にたくさんいるのです。震災を契機に最初は支援という形で入られて、やっぱり来てみたら意外にここいいじゃんということで都市部から岩手の沿岸部の方に移住した、特に若い方、20 代、30 代ぐらいの女性が多いのですけれども、その人たちは実は暮らしにくさは感じているかもしれないのですけれども、生きにくさは感じてないです。私もそうなのですけれども、確かに東京とか、私は名古屋出身なのですけれども、比べたら一々買い物に行くのも面倒くさいしというのもあるし、地下鉄もないから、飲んだ後にタクシー代がかさむとか、そういうのはあるのですけれども、それ以外の部分での生きやすさというのを感じているので、ぜひそういうＵＪＩターンとかにつなげるなら、Ｉターン、Ｕターンの人に詳しく、詳しく話を聞いていく。何故私達が半分以上の給料カットを、給料カットではないのですけれども、給料が減ってでも岩手に来たのかというのは非常に意義がある話が見えてくるのではないかなと思うので、その辺も鑑みていろいろと役に立てていただければと思います。ありがとうございました。

○岩渕明会長　どうもありがとうございました。

黒沢委員お願いします。

○黒沢惟人委員　ｗｉｚの黒沢です。自分でストップウオッチをはかりながら３分以内でお話できればと思います。

まず感想なのですけれども、僕はどうやら個人は日本と欧米の半分ぐらいの幸福の価値観なのかなというふうにちょっと聞いていて思ったので、もしかすると少し的外れているかもしれませんが、さっき久慈市長からお話あったように地域の幸福度が低いと幾ら子供たちの幸福度を高めようと思っても正直無理だなと思っています。なので、少なからずここにいる皆さんは幸福度やや高めで、やっぱりそれをどう伝えていくかみたいなことが今後重要なのかなと思っています。僕の勝手な自己評価の幸福度は 8.5 くらいかなと思っていますが、何かそういったことが必要なのかなというふうに思っています。

幸福度の話の中で、さっきの経済、健康とか、関係性みたいなところで、やっぱり関係

性というところはかなり重要だなと思っています。さっきで言うと社会関係資本というところですか。ただ、これというのはすごく見えづらいし、わかりづらい。資本というと、場合によっては資産にもなるし、負債。要は、プラスにもなるし、マイナスにもなる。関係性で言うとよく言えばコミュニティーであったり仲間とか、そういうことである。悪く言えばしがらみとか、危惧感みたいなものにどうしてもなってしまうかなと思います。なので、少なからず僕はまだぎりぎり20代で、大学まで岩手にいて、その後東京に就職してUターンした身なのですけれども、そういったところでの感じる関係資本というのは恐らく違うなと思っていて、単純に地域だとか岩手というところだけで関係資本というのを統一的に手にするというのは少し難しいかなと思っています。

さっき神谷さんからもお話あったとおり、それは性別なのかもしれないし、年代なのかもしれないというところも含めたところでの関係資本というところの定義が結果的に全世代に対する、岩手県民全世帯に対する、いわゆる幸福度を上げていくというところで重要なのかなというふうに思っていますというのが感想を踏まえ、僕から２分半でお伝えさせていただきました。

ありがとうございます。

○岩渕明会長　ありがとうございます。

では、斎藤委員お願いします。

○斎藤千加子委員　２点申し上げます。１点目は専門にかかわるところ、もう一点は全く個人的な話を申し上げたいと思います。

１点目ですけれども、内田先生のお話を伺ってなのですが、ふだん私が法律的な視点で考えていることと全く逆の話で非常に興味深く、また目からうろこといいますか、発想の転換といいましょうか、おもしろかったのですけれども、あえて申し上げると集合的幸福という考え方はアメリカのように個人の幸福を追求するということがある程度成功した社会ではよろしいのですけれども、日本はそれが残念ながら成功してないというか、まだ道半ばなのです。まだまだ道半ばですよ、個人は大切にされていません。

そういう世の中で、この視点というのは危険もあるのかなと思いながら聞いていたところがあります。注意しなければ、個人の自由に対する抑圧や監視にもつながりかねないのかなと。そうでなければいいのですけれども、集合的幸福という考え方はそのような面もあるのかもしないというふうに、世界的に言うと非常におもしろい視点だと思うのですけれども、その段階までいっていないヨーロッパではない、非ヨーロッパである日本のような社会においてはどうかなというふうに思った点がございます。

もう一つは、がらっと変わって非常に個人的な話で申しわけないのですけれども、お願いになります。先ほど神谷委員がおっしゃいました、全く岩手に関係のない方だと。私も全く岩手に関係ございませんで、九州は長崎出身です。20代で岩手に来まして、岩手県人と結婚して子供３人生んで育ててきたのです。仕事をしながらということなのですけれども、20年ぐらい岩手で生活して、これ岩手だけの問題ではないのはわかっているのですけれども、せっかくここに住んで、ここで子育て、骨を埋めるというふうに思っている人間としましては、経験してきたことを申し上げますが働く母親が何に困っているかわかって

いらっしゃるかなというところです。そして、それを改善すると少子化に少しは、少子化の改善に役立つのではないかなというふうに思っております。

ちょうど何ですか、きらりんきっずの御案内もあって興味深く見ていたのですけれども、いろんなイベントを用意されていますよね、親子向けといいましょうか。こういったものは非常に楽しくて、子供が小さいときに利用したりもしたのですが、イベントはある意味、全レベルに包囲されていて、飽和状態なのかなと思います。何が必要なのかというと、働く母親を休ませてください。疲れているのです。本当に大変なのです、疲れているのです。子供が小さいときは寝られません。子供１人が入院するとあとの２人をどうやって面倒見るのか。親は飛行機で行かなければいけないところに住んでいます。本当に大変です。家事ですね。夫婦で一生懸命回していくわけですけれども、足りません、人手。保育園に預けて、土日も保育園に預かってもらって仕事もしましたですけれども、それでも人手は全然足りない。岩手の人手ですね、子育ての方法に少し回しができないかと、私は自分で、私の給料全額以上使いまして、実は人手を雇って足りない部分は全部カバーしてきたのですけれども、莫大な金がかかります。みんなが同じことできると思いません。そのようなかかりがもうちょっと少ない手ですね、何らかの人手を用意してもらえないか、そして働く母親を休ませてもらえないかと。私はここまで病気しないでやってこれたのはただの奇跡だと思っておりまして、こういったことが改善されていけばもっともっと世の中よくなるのではないのかなと、生きにくさの改善につながるのではないかなと、そして生きやすさの増進につながるのではないのかなというふうに思いました。

以上です。

○岩渕明会長　ありがとうございます。

それでは、酒井委員お願いします。

○酒井明夫委員　東日本大震災津波の後に岩手県から岩手医科大学への委託事業として、岩手県こころのケアセンターといわてこどもケアセンターが設置されました。

前者の方ですが、内丸の岩手医大の中に中央センターがありまして、精神科医、臨床心理士、精神保健福祉士、保健師、看護師など多職種でチームを編成して活動しています。それと同時に、久慈と宮古と釜石と大船渡に地域のセンターがありまして、そこも多職種のチームがいまして、中央と連絡をとりながら日々こころのケアに当たっています。また、全国の医科大学から毎週２人ずつ精神科医が支援に来ていただいていまして、常勤スタッフと一緒にケアに携わっていただいています。

こどもケアセンターの方なのですけれども、これは岩手医大の矢巾キャンパスに中央センターがありまして、これはクリニックをやっていまして、患者さんの診療、子供さんの診療に当たっています。こころのケアです。プラス多職種のチームがおりまして、今後宮古、釜石、大船渡に県立病院にブランチを持っていまして、訪問診療が行われています。こどもケアセンターの方も全国から毎月児童精神科医が支援に来ていただいております。常勤スタッフと一緒に活動しています。皆様御存じのように、こころのケアというのは非常に中長期的な、そういう活動が必要ですので、今後とも活動を継続して 10 年、それ以上していきたいなというふうに思っていますので、どうか委員の皆様におかれましては御協

力、御支援お願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○岩渕明会長　ありがとうございます。それでは、佐藤委員お願いします。

○佐藤富美子委員　少しまとめてきましたので、読ませていただきます。

平成 14 年、地元中学生と地域との融合を目的とした紫波一中融合セミナー事業と地域の得意を持った人との小学生の交流を図ることを目的とした子供の居場所づくり事業をきっかけに活動がスタート。メンバー５人で親と地域と学校が一体となって子供たちを育むことを目指して活動してまいりました。

県下一のマンモス校紫波一中融合セミナーでは、教育委員会の支援をいただきながら福祉体験や職場体験、公民館などで実施している大人の講座の体験をコーディネートしてまいりました。現在も回数や内容が変化しながらですが、継続しております。紫波町子供の居場所づくり事業では、生涯学習施設でもある学校を地域の人にも利用していただく工夫をしたり、紫波町内の中心部以外にも波及させたり、東日本大震災の風化を遅らせるなどの事業を取り入れながら、こちらも長く続けております。そして、平成 18 年からは、紫波町では協働が進められ、市民の活動を応援する市民活動支援センターでも活動させていただいております。委託契約や団体としての信頼をいただいての活動のために、平成 23 年４月にＮＰＯ法人ゆう・もあ・ねっとを設立いたしました。名前の由来は、何事にもユーモアを持ってということと、「ゆう・もあ」ということで、あなたをもっと知りたい、近づきたい、寄り添いたいということと、時には融通無碍でさまざまなことを切り抜けていこうなどの理由からメンバーでこの名前にしました。現在は紫波町情報交流館内市民スタジオで「活動するあなたをサポート」のキャッチフレーズで協働の推進や市民活動の支援をしております。

地元では、主任児童委員、紫波一中の評議員、学校教育審議会委員などもさせていただき、子供たち、地元の子供たちを理解し、子供たちとその家族に寄り添った地域人でいたいなと思っております。

応募の動機を申し上げます。岩手が目指す、ともに支え合い、生き生きと働き、安心して暮らし、楽しく学んでいくことのできる社会の実現に向かって、県民の一人として今までの仕事や活動から学んだこと、経験、ネットワークを生かし、そしてさらに情報を皆さんからいただきながら、さらにさまざま考えていければいいなと思い、応募に至りました。

御講演の感想を申し上げます。今までの経験の中で、最近は地域づくりは人づくり、他人をつくるなんてとても難しい、人づくりは自分づくりかなと思い始めていました。自分自身がやっぱり不安があり、幸福でない感があると他人に寄り添うこととか、手を差し伸べること、地域のことを考えることなどまでには至らないとも感じています。地域活動にかかわっている者として、地域の個々の人の心の健康、個人の幸福を目指し、よい集合につながるような活動も行政の施策とあわせて考えていきたいと、さらに思いました。

岩手の将来については、行政的サービスも、あるいは財源的にも厳しくなっている現状の中で、心身にハンディを抱えた状況にある人、母子家庭、父子家庭、高齢者など事情を抱える人がそれぞれ多少困難な状況にあったとしても、社会の一員として事情に合わせて社会活動に参加しながら日々の生活が成り立つ地域社会を県民ともに目指すような 10 年

後でいたいなと思っております。そのためには、昔ありました向こう三軒両隣の新たな形の平成の向こう三軒両隣構想のようなものが必要かなと考えてまいりました。
以上です。時間短縮に協力できませんでした。ありがとうございます。

○岩渕明会長　どうもありがとうございました。
それでは、下向委員お願いします。

○下向理奈委員　野田村で活動しております下向です。とても有意義な時間を過ごせております。
今何をしゃべろうかなと考えていたのです、ユーモアというのがかけられているということでちょっと衝撃を受けて、少し話したいことが飛んでしまっているのですけれども、私たちは今コミュニティーというものを一番意識して活動をしております。
野田村というのは北三陸でも最大の被災地ではあるのですけれども、今被災した、してない関係なく、コミュニティーというものを村全体でどうやって考えていったらいいのだろうというところに着眼して活動しているのですが、結構外部の方から被災地というものイコール被災者、村民が被災者と思われがちなのですけれども、実はやっぱり村内でも被災した、してない、もしくは被災の規模が違うなどいろいろあるのですが、そのような壁をまず払拭するというのがちょっと今年の活動のテーマになっております。ただ、これはそういうものがすごく今問題だからどうにかしなければいけないねというものではなくて、私自身がコミュニティーというものの楽しさ、あとは意義を感じたということもあって、そこを伸ばしていきたいなという思いからコミュニティーを今重視して活動しております。
地域の人たちというのは、「あなたの村はちょっとやばいんじゃない」と言われるよりも、「あなたの村ってすてきだよね」と言われる方が多分絶対うれしくて、先ほど久慈市長からも「あまちゃん」の効果で久慈の人たちが自分の町に自信を取り戻してきたというお話があったのですけれども、久慈の方々とお話をしているとすごいポジティブなのです。「あまちゃん」が終わってもこういうふうにして地域を伸ばしていきたいと考えている方が結構多くて、野田村から見るとすごいうらやましいのですが、逆に言うと久慈の方々からは、「野田は野田塩があるからいいじゃない」とか、「震災後、大学生がたくさん入っているからうらやましい」なんて言われるのですけれども、それぞれの市町村でいいところが違うと思うのです。ただ、それは自分たちがもしかしたら気づいていないかもしれない。今教育旅行というものが農林水産省、３省連携で総務省などで実施をしていて、県内でも結構やられていると思うのですけれども、野田村はまだまだ体制ができてなくて、受け入れの受け皿が余りない状態なのです。ただ、誘致という営業活動に行かなくても大学生が自ら来てくれる。これは震災後の影響だと思うし、それをただ単純にボランティアで来てくれたではなくて、そこからどうやってつなげていくかということも重要なのではないかなと思っています。
あとママというワードが出ていたので、その点についてちょっと私の個人的な考えなのですけれども、今野田村でもホウレンソウ給食とか、あとこの間はお米をつくって、そのお米でおもちをついてとかという食育などの学校での教育も盛んに、今始まったことではないのですけれども、あるのですが、ただホウレンソウ給食を受けた子供たちが家に帰っ

てお母さんにホウレンソウ食べたいと言うかというところだと思うのです。なので、私は子供たちに地域のことを教えるということも大事だと思うのですけれども、まずはママ世代かなと思っています。私も実は母親をやっていまして思うことは、たまたまこういう活動をしているので、地域のいろんなお母さんにいろんなことを聞けるのですけれども、忙しく働いているママたちは地域の伝統とか文化とかに目を向ける余裕がなかったり、あとはきっかけがなかったりすると思うのです。なので、地域のママたちに地域の未来であったり、地域の子供たち全体とか考えてもらうためには、まずママたちが地域のことを楽しく学べる機会をつくっていくべきではないかなと思っております。

ちょっととりとめのない話になってしまったのですけれども、震災後にいろいろな問題がクローズアップされてきているとは思うのですけれども、過度な問題意識ではなく、それこそ個人の幸せ、個人が幸せと感じられるような前向きな村政であったり、市政だったり、県政であってほしいなと個人的には思っております。どうもありがとうございます。

○岩渕明会長　ありがとうございます。

続きまして、高橋委員お願いします。

○高橋勝委員　３分以内でいきたいと思います。私がかかわっている施設の法人は、児童の放課後児童デイから障害者の就労支援、生活支援、そして高齢者の介護施設ということで全部で 250 名ほどの職員がおるわけなのですけれども、私どもの法人のテーマがお互いに幸せになれる関係づくりというのがテーマなのですけれども、そのテーマについて毎回職員、スタッフと議論するのですけれども、なかなか年を追うごとにそういうイメージが湧かないというふうな話が出てきます。最近、新入職員とその話をした後に「どうだった」と聞いたらば「大きなお世話です」と言われました。これが何を示すかということで、私も今自問自答しながら悩んでいるところなのですけれども。

一方では、介護施設も含めてなのですけれども、先ほど浅沼委員からもお話がありましたように福祉業界の全国標準化の中で相当やらなければならないことが多々出てきておりまして、もう事務仕事がすごいのです。そういった流れの中で幸せ感、幸福感というか、職員がそういうふうな意識になれるかといったら、まずなれない中でやっているということで、具体的にもいろいろあるのですけれども、地域包括ケアという話が出てきているのですけれども、それを岩手の地域でやれるかというとインフォーマルな方々の力を結集してなんて、そういう人たちいませんもの。いない中で何をしろというのかという感じのところもございます。実際に民生委員、児童委員やれる人いませんもの、そういう方も多いです。盛岡はできるかもしれませんけれども、ちょっと離れるところに行けばそういう方はいらっしゃいませんし、また専門職の中ではケアマネさんという人がいるのですけれども、皆さん方かかわっているかと思いますが、ケアマネも今年から更新研修というものが非常に倍以上の時間を費やしてやらなければならないということで県の方からの御指導をいただきながら我々もプログラムの中で今進めているところなのですけれども、やりたくないと、ケアマネをですね、そういう人たちも増えてきている。

これは、介護保険法の考え方の中でケアマネをきゅっと首を絞めれば介護保険ができるだけ使われないような形になっていくのだろうというふうなもくろみももちろんあること

はわかっているのですけれども、何でこういうふうになるのかなというふうなことも非常に矛盾として考えるわけなのですけれども、そういうことを考えると福祉の領域でも働きたくないという方々が多いです。介護人材もそのとおりですね、人口減少の中で人材育てるということも難しいのですけれども、いずれ今までかかわった方々も離れたいというふうに言っているこの御時世ですね。そういった意味でも、今日の話を聞いても私も感じるのですけれども、幸せ感というか、幸福感というか、そういったものをもっともっと一人一人の考え方を共有できる部分を、共感できるところをつなげながらもできるだけ岩手県内で持っている持ち味というものをもっともっと掘り起こして、岩手らしさというか、そのあたりをみんなで共感できるようなものをつくっていくような形の素地の中で福祉も同じ土俵の中でやりとりできればいいなというふうに思っております。

以上です。

○岩渕明会長　どうもありがとうございました。

それでは、谷藤委員お願いします。

○谷藤邦基委員　改めて総合計画審議会の委員をお引き受けするに当たって、実は私どもの任期中には新しい計画をつくる必要がないので、これはちょっと楽ができるかなと思ったのですが、よくよく考えてみますと今走っている総合計画はいわて県民計画ですが、これは今年度含めて３年で終わり、それから復興計画の方もあと３年で終わり、つまり平成30年度で両方とも終わりになるという意味では、31年度以降どうするのだというのをこの２年間で大体方向づけしなければいけないという意味では、これから結構大変だなと思っている次第です。

そういう中で、私自身がちょっとポイントとして考えているのが、一つは時間軸に沿った話で言うと人工知能とか、ロボットとか、これがどれだけさらに発達していくのか、着地点がまだ見えないのですが、この動向次第では、岩手県の産業構造あるいは雇用状況も変わっていくだろうと、それにどう対応していくのかということが一つのポイントだと思っています。

それから、もう一つ空間軸的な話で言うと震災復興の問題、これ非常に大きくて、まだまだこれはちょっと時間がかかるかなと思っているところですが、ただ復興計画があと３年で終わりということもあって、ずっと復興という枠組みで考えていくのがいいのか、それともそもそも震災以前から沿岸の振興、三陸の振興というのが大きな課題としてあったわけなので、そういった枠組みの中で考えていった方がいいのかというあたりはちょっと検討していかなければいけないのかなと思っているところです。

そういった時間と空間、少し大げさに言えば歴史観と世界観が必要で、それを前提にして将来に向けて大局観を持たなければいけないのだろうと思っていまして、そう思ったときに岩手の将来はどうなるのか、さらにどうあるべきかという議論の中で幸福の問題というのをうまく調和させていければいいのかなと思っている次第です。今のところ、これぐらいの課題をこの２年間でこなしていかなければならないのかなと思っているというところであります。

以上です。

○岩渕明会長　ありがとうございます。次に、千田委員お願いします。

○千田ゆきえ委員　17 期の分科会において人口減、豊かさだと思うのですけれども、私は豊かさの方を担当させていただいた中で、豊かさの中で幸福感は切っては切り離せないもので、その中で幸福感というのは実はすごく重要なファクターだなと、県政といいますか、今後の岩手県を考えるに当たって実はすごく重要なファクターではないかなと何となくそのときに感じていて、今回こういった研究会も立ち上がって、幸福感という視点から県政を考えるというのは大変興味深いですし、ほかの県がなさっているかどうかというのはちょっとわからないのですけれども、すごく斬新な視点からの考えだなと思って、すばらしいなと思って拝見しておりました。

先般、岩手県立水沢商業高校さんの評議委員を御指名いただきまして、第１回目があって水沢商業さんの学校運営ですかね、そのまとめたものを拝見したのですけれども、その中にやはり岩手県立ですので、第３期アクションプランに基づいて学校運営の方をお考えになったという中で、自己肯定感ですね、生徒さんが自分を大切にされているとか、自分が大切だと思うというような自己肯定感のパーセンテージを上げていこうというようなのが盛り込まれておりまして、今回の幸福感というところにもつながってくるのかなと思いました。

先ほどいろいろ話が出た中で、お子さんの話をする前に、やはり親御さんの価値観を変えていく必要があるのではないかというような話も出ました。そこもすごく共感を覚えるところですけれども、前期、前々期と教育が今後の岩手を変えていくのではないかということをずっと私は申し上げていたのですけれども、そうはいっても小中高という教育の中で、いかに岩手のすばらしさを小さい子供たち含めて学生に伝えていくのかということが大切なのではないかなと思います。

先ほど青木委員や遠藤委員の方から働く場所がないというような話が出たのですけれども、私は北上川流域ものづくりネットワークがありまして、それのネットワークの中の次の 10 年を考える委員会というのが立ち上がって、御依頼いただいて、私は委員になって、今一生懸命何人かで次のネットワークをどうしていくかという中で、ネットワークそのものの動きというのが企業の中での人づくりだとか、人材育成だったりどうしていくかという中で、やっぱり前期の中でも出ましたけれども、岩手県の人口減、社会減の中でどうしても高校の卒業とともに県外に出て行く方が多いということなので、企業としても、ではそこをどう食いとめるかという話がネットワークの中でも出るのですけれども、実は企業というのは人が足りていないのです。募集しても人が来ない。一方で、働く場所がないという声がある。このギャップを埋めていく動きが重要なのではないかなと、そこをすごくネットワークの中でもお話ししていて、バスツアーをやったりとか、もともと教師が県内の企業のことを知らないのではないかとか、企業側がもっと発進力を高めていかなければいけないのではないかとか、もともと条件が悪いから、働く会社があることはわかっているけれども、東京のいい条件の会社さんの方に行くのかとか、そういった本当に細かいところを潰してミスマッチングだったりとかというのをなくしていくというのがきめ細かいところでやっていく必要が実は大きな結果につながっていくのではないかなという話をネ

ットワークの中ではさせていただいておりました。企業の方というのは少ないように拝見したので、ものづくりとか、民間企業の立場から２年間何かいい提言ができればいいのかなと思っておりますので、今期もよろしくお願いしたいと思います。
以上です。

○岩渕明会長　どうもありがとうございました。
恒川委員お願いします。

○恒川かおり委員　小学校、中学校、高校の授業の中で多様な生き方、価値観を持つ大人の人たちと子供たちをつなげる、そういう取り組みを 12 年間ほど行っているＮＰＯです。これまで１万 5,000 人ぐらいの子供たちと、それから 1,200 人ぐらいの大人の人たちに学び合っていただいたのですが、高校生、大学生の長期、短期のインターンシップも受け入れをしておりまして、その中でいろいろ豊かさとか、幸せとかというのを子供たちが実際にどういうふうに考えているのかなということを話を聞く機会があるのですが、先日ある高校生が毎日テレビとか、ネットとかで見ると、誰かが必ず、偉い立場の人が、誰かが必ず謝っている。えらい立場でなくても芸能人とか謝っていて、何か悪いことをして、犯人を捜すようなそんな時代の気がして、これは豊かではないような気がすると言う高校生がいました。それから、ある大学生はずっと恋愛問題ですごく悩んでいる大学生で、恋愛格差というのがすごくあるという話をしていて、自分はちょっと自信がないので、異次元の恋愛にはまってしまうと、実際の人ではなくて、そういった仮想の恋愛にはまってしまうみたいな話をしていて、もしかしたらうまくいくかもしれないのにもったいないなと思って話を聞いていたのですけれども、同じようにそういうことで経済とか、文化とか、いろいろある中でも恋愛にも貧困があるのだよという話をその大学生に教えてもらったのですけれども。
あともう一人の方は、やっぱり今子供の貧困というのがすごく問題になっていて、経済的な、物質的な貧困以外にも、やっぱり文化的な側面で、一人で御飯を食べなくてはいけないということとか、あるいは文化とか、生活の中で伝えられないとかすごく問題になっているのですけれども、大学の中でも孤食、一人でいるのを見られたくないからトイレで御飯食べるというような事例もあるよという話を聞いて、すごく驚きました。
そういうことで、実際に豊かさとか、幸せということを先ほど高橋委員もお話しされていたのですが、実際に小学生、中学生、高校生、世代ごとに全部感覚がすごく違うなということを、もちろん大人の人たちの世代もそうだと思いますが、ものすごく違っているなというふうに思っておりまして、例えば委員の皆さんだったり、行政の方だったり、大人の人が直接子供たちと岩手で暮らす豊かさというのはどんなものだろうかとか、幸せとはどうだと思うというようなことを数多く語り合うような、そういう機会が本当に必要だと思っております。
それから、自分がだめだからといったように自己責任論で、自分の自己肯定感を育めない土台があるなということはすごく問題だなと思っておりまして本来だったら小学校、中学校、高校というふうにたくさん勉強して、成長していくに従って可能性が広がっていくはずなのにどんどん、どんどん現実を知って高校とか年齢が高くなるに従って、自分がだ

めだから可能性がないのだみたいな、そういうふうなことを言う高校生がすごく多いなと思っておりますので、そういうことに対してもすごく大事なのは、実際に今の岩手で暮らしている地域のいろんな資源、いろんな人材だったり、企業さんだったり、自然の豊かさだったり、あとさっき青木委員がおっしゃっていました文化、そういったものを数多く複数回できるだけ多く知ってもらったり、触れ合ってもらったり、それも直接その人の物語を伝えていかなくてはいけないというふうに思っておりますので、ぜひ今回尺度をいろいろ幸福度調査、いろんなことをやられるようですけれども、子供たちとか世代間といったあたりもぜひ検討の中に入れていただけたらうれしいなというふうに思っております。

以上です。

○岩渕明会長　ありがとうございました。

それでは、森奥委員お願いします。

○森奥信孝委員　今日は幸福について、内田先生の話をお聞きしていろいろ勉強になりました。その中で、レジュメにあるように「全体的な信頼関係が低い地域に住んでいると心理的ストレスが感じやすい」ということがありました。それを企業の立場として考えて置きかえてみると「全体的な信頼関係が低い企業に働いていると心理的ストレスが感じられやすい」というふうに置きかえられると思いました。私も縫製工場の経営者として、やはりどうすれば信頼関係が生まれるのか、どうすれば働きやすい会社になるのか、働きがいを感じる会社にしていくことができるのか、ということを考えたときに、やはり人材育成が非常に大切なのかなと思いました。先輩から後輩へ、そして上司から部下へと様々なことを教えることによってコミュニケーションが生まれ、そこで今まで以上の信頼関係も生まれる。社員の人達も人材育成で育って行けばその分働きがいを感じる。そして、働きがいを感じる人が増えれば業績も伸びて、結果、収入増にもつながり、それらの相乗効果として幸福度にもつながっていくのではないかと思うのです。特にも若い人に対する人材育成というのは、10 年後の岩手を考えたときに、最も大切なことであると思います。学校を卒業して社会人になってからの若者の人材育成は受け入れた各企業の役割です。岩手の各企業に働く若者がそれぞれの業界の中で全国的に最も優秀な人材に育てることが競争力向上や付加価値向上につながり、企業の業績向上にもつながり、その結果として各地域での雇用の拡大や活性化増、及び岩手県全体の発展につながると思います。しかし、人材育成というのは非常に時間とお金がかかります。県としても 10 年後を見据えて各地域の、各企業の人材育成に対してさまざまな施策及び支援を行って頂く様、よろしくお願い致します。

○岩渕明会長　どうもありがとうございました。

予定よりも大体 10 分遅れ程度で進行しておりますが、私も一言述べさせていただきます。岩手県民がいかに自信を持って生きていくかというところで、どうやってその自信を植えつけ芽生えさせるかというところが必要であり、我々岩手大学という立場から言うと、現在ＣＯＣ事業（地(知)の拠点整備事業）やＣＯＣプラス事業（地(知)の拠点大学による地方創生推進事業）の中で地元定着率の向上に取り組んでいます。しかし定着しても、１年後には離職してしまう大卒者も多いという現実も一方であります。就職したけれども、継

続性がない。そういう中で岩手の豊かさであるとか、そうしたことで頑張ってみようという、そういう価値観であるとか、我々はこれまで経済的な側面で、例えば大手がいいよ云々ということで何の疑問も持たずに 30 年、40 年、日本の高度経済成長とともに来たわけですが、やはりある意味で人口減少に向かい始めたときには価値観も変えていかなければいけない。それを教育の中でどう育んでいけるかということがやはり大きい命題になっています。

もう一つは、知事もおっしゃられている若者と高齢者の活躍についてです。高齢の方々にも生き生きと活躍してもらいたいと考えた時に、現在の生産年齢人口の考え方はどうなのかと。今は 15 歳以上 65 歳未満の人口を生産年齢人口としていますが、集団就職の時代の考え方だよねという指摘もあり、18 歳以降からを生産年齢人口と考えるべきではないかという議論もあって、例えば延びた分だけ 70 歳程度まで上限をあげていくというような社会環境ができてくると、また活力も出てくるのではないかと思います。

委員の皆様方には２年間、これからいろいろな立場から意見を頂戴し、最終的にどういうまとめを２年後に我々が行っていくのかというミッションはまだはっきりとは見えておりませんが、様々な立場でいろいろな意見を交わしながら県の施策に活かしていければと思っておりますので、ぜひ御協力いただければと思います。

それでは、進行を事務局にお返しします。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　岩渕会長、議事進行大変ありがとうございました。

５　その他

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　それでは、次第の５のその他でございます。最後に、全体を通しまして委員の皆様方から何かございましたら御発言をお願いいたします。よろしゅうございますでしょうか。

「なし」の声

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　それでは、委員の皆様、本当に長時間にわたりまして御審議賜り、大変ありがとうございました。

６　閉　会

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　それでは、閉会に当たりまして、最後に達増知事より一言御礼を申し上げたいと思います。

○達増知事　第 76 回の岩手県総合計画審議会ということで、新しい年度、新しい任期、第１回目の審議会、やっぱり「幸福」というテーマが登場したせいか、今までとまたがらっと雰囲気が違ったような感じがいたします。

幸福について、私もいろいろ調べたり、人に聞いたりして勉強もしているのですけれども、一つわかりやすいなと思った幸福の話で、３つの段階に分けて、第１段階は快楽としての幸福、これはおいしいものを食べてハッピーとか、きれいな景色を見てハッピーみた

いなそういう幸福で、この辺は個人に幸福の追求を任せるのがちょうどいいのかもしれないのですけれども、ただ文化、芸術とか、スポーツとか、結構社会性、公共性の高いそういう快楽としてのハッピーもあるので、行政として無視もできないかなという感じもしております。

第２段階として、満足としての幸福、これは生活満足度、生活の質と言ってもよく、先ほどの内田先生の話で語られた幸福というものの対象が大体その辺ではないかと思います。生活水準、所得の問題でありますとか、健康の問題でありますとか、そして時間の使い方、使える時間、そして地域とか、家族とか、関係性の問題とか、この辺を行政としてどう取り組んでいくかというあたりが中心なのかなと思います。

第３段階として、達成としての幸福とその本には書いてあったのですけれども、我が人生は幸福であったかみたいな、人生丸ごと幸福かというような哲学的あるいは宗教的な段階で、ある種の悟りの境地に入ればもう幸も不幸もなくという意味で不幸がないみたいな境地に人間は達したりしているのですけれども、まさにこの辺は個人的にそこまで行けるかどうか、それぞれ挑戦するような領域かなとは思うのですけれども、ただ人間の本質として教育基本法にも人格の完成が教育の目的とかあるのですけれども、気の持ちようによって幸福というのを実像的、実在的に実現するみたいな話というのは人間の本質としてあるのだということも行政として視野には入れておかなければならないのかなというふうに思っております。

ということで、幸福については純粋な個人マターな面もあるし、また集団として、あるいは公共政策として取り組んでいくのにふさわしい部分もあるという中、私が一つ参考にするのは宮沢賢治さんの「世界が全体幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という言葉であって、これは基本的に個人主義的な言葉だと私は思っていて、目指されているのは個人の幸福なのですけれども、ただ個人が個人主義的に個人の幸福を目指すに当たって世界とか、あるいは自分が属する集団全体の幸福というのも無視できないみたいな、そういう宮沢賢治さんの問題意識というのは結構岩手県民には広く共有されているのではないかなと思っておりまして、そういう問題意識を持ちながら考えていけば岩手ならではの幸福ということを意識したいい公共政策が展開できるのではないかなと思っておりますので、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

○南政策地域部副部長兼政策推進室長　最後に事務連絡でございますが、この後17時15分から３階の「梅の間」におきまして懇親会を開催いたします。懇親会御参加の皆様方におかれましては、準備が整い次第、エレベーターにて「梅の間」の方に御移動をお願いいたします。

それでは、本日の審議会はこれをもちまして閉会といたします。本日はまことにありがとうございました。